三重県埋蔵文化財調査報告１１５－２７

一般国道２３号中勢道路（１０工区）建設事業に伴う

里前遺跡（第５次）発掘調査報告

2009（平成 21）年１月

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県の北東部に位置する伊勢平野は、東に伊勢湾を臨み、西には鈴鹿・布引の山々をひかえる風光明媚な所です。この伊勢平野の中央部に位置する県都津市は温暖な気候と安濃川や岩田川によって形成された肥沃な土壌により、古来より人々の生活が連綿と営まれた地域です。なかでも安濃川の河口には、福岡県の博多津、鹿児島県の坊津とともに日本三大津として知られる安濃津が存在し、海運交通の拠点として栄えた港町がひらかれていました。

今回報告する里前遺跡は、一般国道２３号中勢道路（１０工区）建設に伴い遺跡の現状保存が困難な部分について、発掘調査を実施しました。これまでの調査からも、この地が中世の物流の要所であった可能性のあることが明らかになっています。今回の調査でも、たくさんの陶器類や、近世の人々が使用していたと考えられる木組の井戸が出土し、この地における人々の生活の様子の一端をうかがうことができました。

しかし残念ながら、これらの遺構はすでに消滅しました。開発が進み私たちの生活が便利になることは喜ばしいことではありますが、古くからこの地に生活していた人々が遺した文化財を保存していくことも大切なことであります。消滅してしまう遺跡を記録保存という形で少しでも皆様方に知っていただき、埋蔵文化財保護へのより一層のご理解とご協力を願うばかりです。

末筆となりましたが、調査にあたり、多大なるご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成２１年１月

三重県埋蔵文化財センター

所　長　吉　水　康　夫

例　　言

1　本書は三重県津市野田字里前に所在する里前遺跡の第５次発掘調査結果をまとめた報告書である。

2　本書が扱う発掘調査の原因事業は、一般国道23号中勢道路建設事業である。

3　第５次調査は、三重県教育委員会が国土交通省中部地方整備局から委託を受け、平成16年度に実施した。
調査費用は、国土交通省中部地方整備局の全額負担による。

4　発掘調査の体制は以下のとおりである。
調査主体：三重県教育委員会
調査担当：三重県埋蔵文化財センター
現場作業：社団法人中部建設協会

5　現地調査（平成16年当時）の担当は、下記のとおりである。
三重県埋蔵文化財センター（調査研究Ⅱグループ）
主幹兼グループリーダー　泉　雄二　　主査　辻本泰宏　　主事　船越重伸
臨時技術補助員　川崎志乃

6　本書の作成業務は三重県埋蔵文化財センターで実施し、調査研究Ⅱ課が中心に行った。遺構と遺物の写真は調査担当者及び石井康晴が撮影した。報告文の執筆は石井、全体の編集は石井と上村安生が担当した。

7　報告書作成にあたっては、以下の方から御指導と御助言を賜った。記して感謝の意を表したい。
（敬称略　当時）
藤澤　良祐（愛知学院大学）

8　里前遺跡（第５次）については、すでに『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報17』（三重県埋蔵文化財センター　2006年）に、その調査途中の概要を報告しているが、本書をもって正式報告とする。

9　本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

凡　　例

<地図類>

1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1：25,000地形図、津市都市計画図である。

2　これら地図類は、国土地理院発行地形図を除き、国土調査法の日本測地形による座標第Ⅵ系（旧国土座標）で表現されているものであるため、平成14年４月から施行されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。

3　挿図の方位は全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏６°40′、真北方位は西偏０°16′（平成10年）である。

<遺構類>

4　土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄偏著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967年初版）を用いた。

5　遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは、立面図となっている。

6　遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。

ＳＤ･･･溝・堀　　ＳＥ･･･井戸　　ＳＫ･･･土坑　　ＳＺ･･･落ち込み　　pit･･･ピット、柱穴

<遺物類>

7　当報告での遺物実測図類は実物の1／4を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、その都度指示をしている。

8　遺物観察表は、以下の要領で記載している。

報告番号････当報告書での挿図掲載番号である。

実測番号････実測段階の登録番号である。

器　　種････遺物の器種・器形等を示す。

出土地区・出土遺構･･･調査時に設定したグリッド名及び遺物が出土した遺構番号を記した。

法量(㎝)････遺物の法量を示す。口は口縁部径、底は底部径、器高は遺物の高さを示す。

調整・技法･･･ おもな特徴を内面は　内:　外面は　外:で示した。

胎　　土････小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

焼　　成････「良」「やや良」「やや不良」「不良」で区分した。

色　　調････その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残　　存････残存度を分数で示した。残存がわずかなものは小片、全体が残っているものは完存と記した。

備　　考････遺物の特徴となる事項を記した。

<写真類>

9　写真図版の遺物番号は、実測図報告書番号と対応している。

10　遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本　文　目　次

Ⅰ　調査にかかる諸経過 ……（1）

1　中勢道路建設と埋蔵文化財保護

2　調査の体制

3　調査の経過

4　調査の方法

5　整理作業の方法

Ⅱ　位置と歴史的環境 ……（3）

1　位置

2　歴史的環境

Ⅲ　遺　構 ……（6）

1　調査区の基本層序

2　検出した遺構

Ⅳ　出土遺物 ……(15)

Ⅴ　まとめ ……(26)

1　過去の調査成果

2　井戸について

挿　図　目　次

第１図　里前遺跡調査区位置図 ……（３）
第２図　周辺遺跡位置図 ……（４）
第３図　ＳＥ230平面図・土層断面図 ……（８）
第４図　ＳＥ220・ＳＥ231平面図・見通し図・土層断面図 ……（９）
第５図　調査区土層断面図 ……(10)
第６図　遺構全体図 ……(11)・(12)
第７図　出土遺物実測図１ ……(17)
第８図　出土遺物実測図２ ……(18)
第９図　出土遺物実測図３ ……(19)
第10図　出土遺物実測図４ ……(20)
第11図　井戸変遷図 ……(27)

表　目　次

第１表　遺構一覧表１ ……(13)
第２表　遺構一覧表２ ……(14)
第３表　出土遺物観察表１ ……(22)
第４表　出土遺物観察表２ ……(23)
第５表　出土遺物観察表３ ……(24)
第６表　出土遺物観察表４ ……(25)
第７表　井戸一覧表 ……(28)

写　真　図　版

図版１　調査区全景
図版２　調査前状況　調査区全景
図版３　ＳＥ220検出状況
図版４　ＳＥ231検出状況
図版５　出土遺物１
図版６　出土遺物２
図版７　出土遺物３
図版８　出土遺物４
図版９　出土遺物５
図版10　出土遺物６

Ⅰ　調査にかかる諸経過

1　中勢道路建設と埋蔵文化財保護

中勢道路は、鈴鹿市玉垣町から松阪市小津町に至る延長33.8㎞の国道23号線のバイパスである。この道路は、鈴鹿市・津市・松阪市の３市を通り、国道23号の交通渋滞を緩和させることや、バイパス周辺の適切な土地利用を図り、中勢地区の経済発展に寄与することを目的に計画されたものである。

この計画地内に所在する埋蔵文化財については、昭和58年に計画路線内の分布調査を行い、建設省中部地方建設局（当時）と三重県教育委員会が埋蔵文化財の取扱について協議を行った結果、現状保存の困難な遺跡については事前に発掘調査を行い、記録保存をすることとなった。

現地調査は、昭和63年度に開始した。国土交通省中部地方整備局（平成12年までは建設省中部地方建設局）から三重県が委託を受け、三重県埋蔵文化財センター（昭和63年度は三重県教育委員会）が調査を担当している。調査にあたっては、「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流要綱」に基づき、津市教育委員会（昭和63年度～平成11年度）と鈴鹿市教育委員会（平成７年度～平成９年度）から派遣職員を得た。また、現地作業については調査の円滑化を期して、建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に委託している。

調査事業の実施にあたっては、建設省中部地方建設局・三重県・社団法人中部建設協会の三者で昭和63年4月8日付け「埋蔵文化財発掘調査協定書」を締結し事業を推進した。その後、事業計画の進展に合わせて、建設省中部地方建設局・三重県・社団法人中部建設協会の三者が平成3年10月31日付けで「変更協定書(第1回)」を、平成5年9月7日付けで「変更協定書(第2回)」を、平成10年3月31日付けで「変更協定書(第3回)」を締結し、道路建設事業との調整を図った。また、平成11年3月31日付けで、改めて6・8～10・13・14の各工区を対象とした「埋蔵文化財発掘調査協定書」(平成11年4月1日～平成16年3月31日)を締結し、平成11年度以降の事業を推進した。

さらに、平成16年3月31日付けで「変更協定書(第1回)」を、平成18年3月30日付けで「変更協定書(第2回)」を締結し、三者体制は終了した。平成18年度以降は現地作業を含めた委託契約書が中部地方整備局と三重県で締結され、事業を推進している。

2　調査の体制

里前遺跡（第５次）の現地調査及び整理、報告書作成年度の調査体制は以下の通りである。

（平成16年度）

主幹兼調査研究Ⅱグループリーダー　泉　雄二
主　　査　　辻本泰宏・上村安生
主　　事　　船越重伸・福島伸孝
技　　師　　山中由紀子
臨時技術補助員　川崎志乃・坂　佳彦
室内整理員　黒川敬子・太田浩子・森川絹代
　　蒔田やよい・宇河由起子
　　山口香代

（平成19年度）

調査研究Ⅱ課長　田村陽一
主　　幹　　上村安生
主　　査　　薗部英幸
主　　事　　淺尾　太・石井康晴
技　　師　　原田恵理子・水谷　豊・角正芳浩
　　野嶌美沙子
臨時技術補助員　才木　薫・小林俊之
室内整理員　黒川敬子・太田浩子・森川絹代
　　北岡佳代子・山口香代
　　西山実公子・中西千鶴
　　中村敬子・小倉靖子・浜崎佳代

（平成20年度）

調査研究Ⅱ課長　田村陽一
主　　幹　　上村安生
主　　査　　薗部英幸
主　　事　　淺尾　太・前野謙一
技　　師　　原田恵理子・水橋公恵
　　野嶌美沙子
臨時技術補助員　才木　薫
室内整理員　黒川敬子・太田浩子・森川絹代

北岡佳代子・山口香代
西山実公子・中西千鶴
中村敬子・小倉靖子・浜崎佳代

3　調査の経過

（1）　経過概要

平成10年５月25日～10月20日に第１次調査が行われ、ほ場整備事業に伴う第２次調査（平成12年度）、三泗川の河川改修事業に伴う第３次・４次調査（平成14年度）が実施されてきた。それぞれの位置関係については、第１図で示している。

第５次調査は1530㎡について実施した。隣接する三泗川の工事の影響により、当初予定していた排土置場が使用できなくなったため、国土交通省、中部建設協会、三重県埋蔵文化財センターの三者で協議し、排土を場外搬出することになった。

平成16年５月18日から調査区の南半分において、重機によって表土の掘削を開始し、６月１日より作業員による包含層および遺構掘削を行った。調査は調査区の南端部から、中央部へ広げていった。北半分については、６月28日から重機掘削、７月15日から包含層および遺構掘削を開始した。７月21日には掘削を終え、写真撮影等を行った。８月２日より遺構実測、井戸３カ所の断ち割りを行い、８月27日にすべての現地調査を終了した。

（2）　文化財保護法にかかる諸通知

当発掘調査にかかる文化財保護法関連の諸通知は以下により行っている。

・発掘調査の実施報告（文化財保護法第58条の２第１項、県埋蔵文化財センター所長→県教育長）
　平成16年５月14日付け　教埋第90号
・文化財発見・認定通知（遺失物法、県教育長→津警察署長）
　平成16年９月７日付け　教委第４－４号

4　調査の方法

（1）　地区設定

調査区内は、基本的に４ｍ方眼で区切り、小地区（グリッド）を設定した。東西方向は西からアルファベットを、南北方向は北から数字をつけ、北西隅の交点をその地区の符号とした。なお、小地区設定にあたっては、第１次調査に準じて設定しており、国土座標軸の向きとは異なっている。

（2）　遺構番号

第５次調査で発見された遺構は基本的に200～の番号を付している。

（3）　遺構実測

遺構実測図および調査区の土層断面図は、手描きにより1/20で作成した。

（4）　遺構写真

遺構写真は、重要なものを４×５インチ判及び６×９判で撮影し、細かい記録は35㎜判で撮影した。それぞれのフィルムは、白黒及びカラーリバーサルで基本的には同カットの撮影を行った。

5　整理作業の方法

調査で出土した土器類は調査現場で取り上げ後、速やかに整理所で洗浄、乾燥、接合等の１次整理作業を行った。１次整理作業後、遺物の選別作業を行い、遺物実測を行った。実測図等が完成した遺物は、報告書作成のためのレイアウトを作成し、報告書番号順に遺物整理箱に保管している。遺物実測を行わなかったものは、出土遺構毎、包含層等はグリッド毎にまとめ、遺物整理箱に番号を付し、保管・管理している。

報告書掲載遺物の写真は、主だったものについて６×９判で撮影した。

木製品は調査現場で取り上げ後、速やかに整理所で洗浄し、実測が可能なものは実測および写真撮影を行い、その後、保存処理作業を進めた。

なお、発掘調査に関連する資料類には、発掘調査期間に作成された図面（平面図・土層断面図など）、遺構カード（縮尺1/40）、調査日誌、写真類がある。また、整理段階で作成された遺物実測図、遺物写真などもあり、これらは所定の番号を付け、当センターにて保管している。

Ⅱ　位置と歴史的環境

1　位置

里前遺跡（1）は、三重県津市野田字里前にある遺跡である。津市は三重県のほぼ中央部に位置しており、北部は志登茂川流域、中央部は安濃川・岩田川流域、南部は雲出川流域からなる。

里前遺跡は鈴鹿山脈南部に位置する錫丈ヶ岳を水源とし伊勢湾に注ぐ安濃川と、津市西部の長谷山系を水源とし伊勢湾に注ぐ岩田川によって形成された沖積平野の南縁に位置する。津市殿村で安濃川から分流した三泗川は南へ流れ､野田で岩田川に合流する。また、岩田川を挟んだ南側には半田丘陵が広がる。

そもそも、中世の安濃川と岩田川はかつて合流していたようで、三泗川は旧安濃川筋と考えられるとも言われる[1)]。また、藤堂高虎が津に入城した際、城下を安濃川の洪水から守るために、「さんし」とよばれる南河路の西方で安濃川の右岸堤防を意図的に低くし、大出水の時には、ここを切り岩田川の方へ水を流すようにしたとも言われている[2)]。

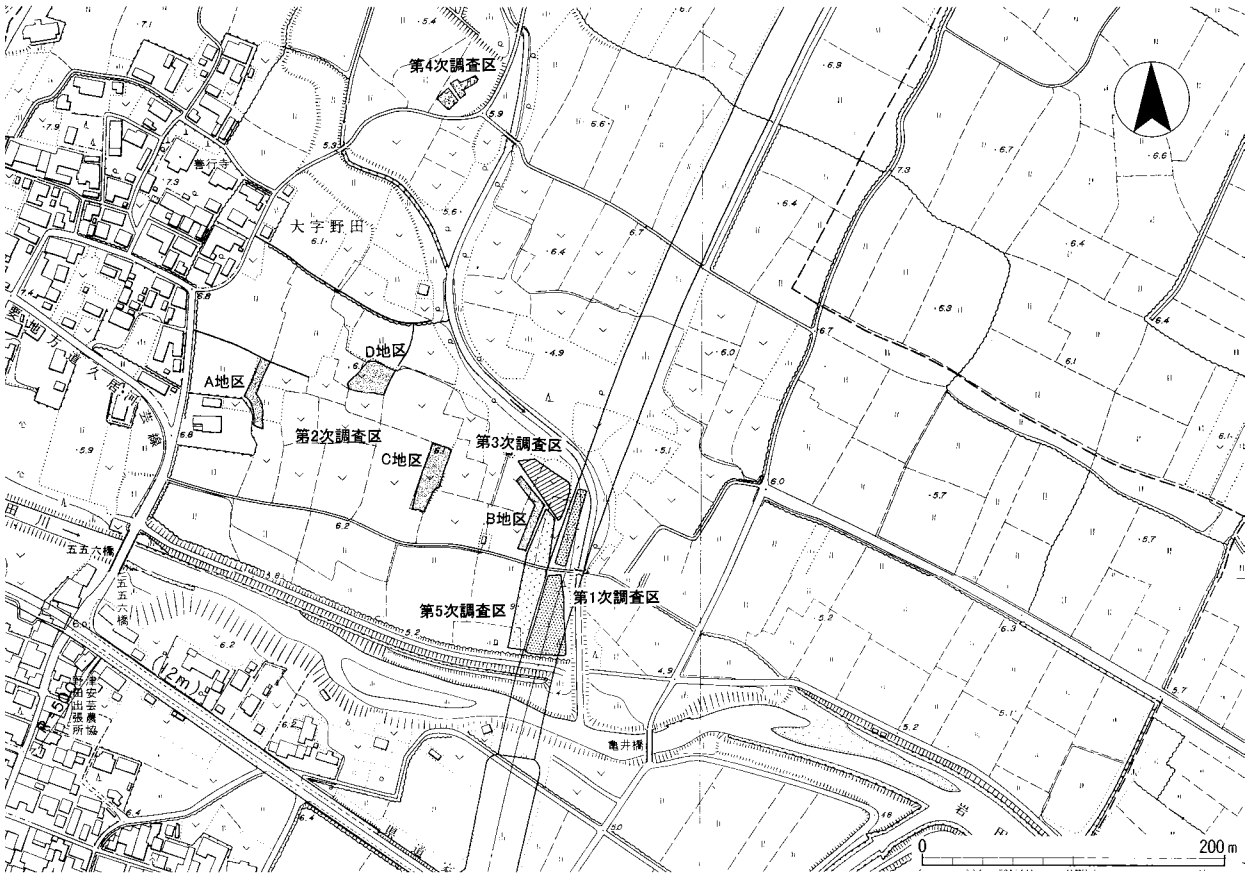
里前遺跡は、三泗川と岩田川が合流する地点にあり、遺跡の東を三泗川、南を岩田川が流れる。調査前の状況は耕地の縁辺部および河川との境界部の荒地である。

2　歴史的環境

（1）周辺の遺跡

里前遺跡周辺では、近年国道・県道の建設工事やほ場整備に伴う発掘調査が多く、安濃川流域の各時代の様相を知る報告がたくさんされている。歴史的環境についても各報告書にて再三触れられているので、ここでは重複をさけ、今回の調査に関連する平安時代から中世・近世にかけての遺跡について概観する。

近隣の遺跡での中世の遺構・遺物の検出例遺跡としては、安濃川左岸に位置する位田遺跡（2）では、



第1図　里前遺跡調査区位置図（1：5,000）

平安時代の掘立柱建物が検出され、多量の緑釉陶器が出土した[3]。蔵田遺跡（3）では、平安時代末から鎌倉時代初頭の掘立柱建物が条里の方向にほぼ合致して検出された[4]。右岸でも、替田遺跡（4）では、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物が検出されている[5]。弐ノ坪遺跡（5）では、平安時代前期とみられる掘立柱建物が、条里の地割に並行して検出されている[6]。岩田川を挟んで対岸に位置する梁瀬遺跡（6）からは平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物が検出されており[7]、里前遺跡の周辺には中世の遺跡が多く点在する。

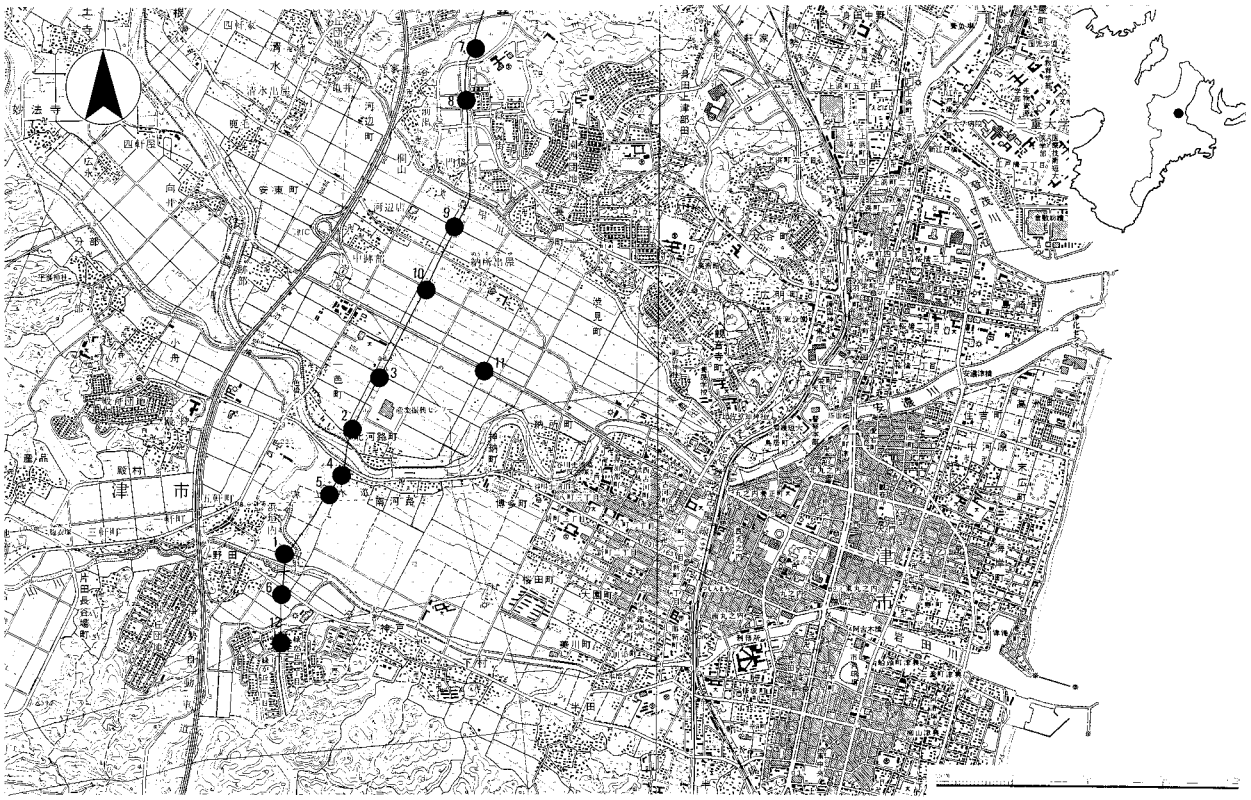
（2）条里

奈良時代以降、この地域も条里制を施行したと考えられる。安濃川流域は条里制の方画地割が良好に残っていた地域で、いずれも北に対して30°東に偏っていたとされる。これは奄芸郡にも共通した地割りとなっていて、概ね海岸線に沿ったものである[8]。

前述の蔵田遺跡や弐ノ坪遺跡では、条里の方向に沿った建物跡も多数確認されている。また、里前遺跡のある「野田」は中世には神宮領荘園が存在していたようで、13世紀初頭頃に成立したとされる『神宮雑例集』の「野田御園」、さらに14世紀後半頃に成立したとされる『神鳳鈔』の「野田御厨」に相当すると考えられる[9]。しかし、これにあたる集落の比定は定まっておらず、周辺の発掘調査では関連する遺構などはまだ確認されていない。

（3）交通

近隣諸国との交易について陸路では、奈良時代に大和国から柘植・加太を越えて伊勢神宮に向かう官道が安濃川付近を通っていた。これが、平安時代になると阿須波道が新たに開削され、近江国から伊勢国へは鈴鹿峠を越えることになった。官道には30里（約16㎞）ごとに駅家が設置され、『延喜式』によれば、伊勢神宮に向かう官道には鈴鹿、市村、飯高、度会の各駅があったとされる。この官道は鈴鹿駅で東海道から分かれて、市村駅を経て野田の集落に入る。野田から飯高へ至る経路としては、野田集落から南側の谷を抜けて久居に至る経路と野田集落から東に向かい半田丘陵を抜けて藤方に至り、そこから伊勢に向かう経路がある[10]。梁瀬遺跡はこの東に向か



第２図　周辺遺跡位置図（1：50,000）国土地理院 1：25,000「津西部」「津東部」

う道上になる。この遺跡からは平安時代末まで機能していたと思われる道路状遺構が検出されており、かつての官道だった可能性がある[11]。近世になると、津から布引山地の長野峠を越えて伊賀に至る「伊賀街道」が整備された。この街道はもともと畿内と伊勢神宮とを結ぶ参詣路であったが、藤堂高虎が慶長13（1608）年に伊勢・伊賀へ移封されたときに津を本城とし、上野を支城に置いた。この時津藩の官道として整備されたものである。この道は現在の国道163号と同じく、遺跡の周辺を北から西へ迂回し、さらに西へ向かうようなルートで通っていた。

また、水路としては、岩田川河口には中世の港町として著名な安濃津が存在し、山茶椀をはじめとした尾張産陶器の集積地として機能していたと考えられている。これまでの里前遺跡の調査で墨書土器や使用痕のないものを含んだ大量の山茶椀が出土していることや水運の便がよいという立地から、遺跡周辺は水陸双方の交通の要所であったと思われる。里前遺跡は安濃津から搬出された山茶椀が直接到達した場と考えられ、安濃郡内の物流に関係した遺跡である可能性があるとも指摘されており[12]、当時の物流面から考えるうえでも、重要な位置にあったことがうかがえる。

［註］

1）伊藤裕偉　『中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』岩田書院　2007

2）高士洋幸ほか　『大和街道・伊勢別街道・伊賀街道-歴史の道調査報告書-』　三重県教育委員会編　1983

3）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路建設事業に伴う位田遺跡発掘調査報告』　1999

4）三重県埋蔵文化財センター　『一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う蔵田遺跡発掘調査報告』　1999

5）三重県埋蔵文化財センター　『一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う替田遺跡（第1・２次）発掘調査報告』　2008

6）三重県埋蔵文化財センター　『一般国道23号中勢道路建設事業に伴う弐ノ坪遺跡発掘調査報告』　2005

7）三重県埋蔵文化財センター　『梁瀬遺跡発掘調査報告』　2004

8）仲見秀雄「奄芸・安濃・一志郡の条里制」　『伊勢湾岸地域の古代条里制』　東京堂出版　1979

9）平凡社『日本の地名』　1988

10）岡田　登「伊勢国市村駅家所在地考」『皇學館論叢』第13巻第６号　1980

11）前掲註７）と同じ

12）前掲註１）と同じ

Ⅲ　遺　構

1　調査区の基本層序

本調査区は、東側に第１次調査区、北側に第３次調査区、西側北半に第２次調査Ｂ地区が隣接する。第1次調査区同様、現況は耕地の縁辺部及び河川との境界部の荒れ地である。

調査区内は東を流れる三泗川にむかって緩やかに低くなっている。

基本層序は、第1層が暗灰黄色砂まじり粘質シルト（表土）、第２層が黄灰色中砂質細砂（旧耕作土）、第３層が黄灰色シルト（検出面）であり、これより下が遺構基盤層となる。

2　検出した遺構

今回の調査では、鎌倉時代から近世までの遺構を検出した。以下、主だった遺構について記述する。遺構の深さはすべて検出面から測定した数値である。

なお、第１次調査を含めた検出遺構の概略については、遺構一覧表にまとめたので参照されたい。

中世の遺構

井戸ＳＥ230　調査区北部で検出した素掘りの井戸である。遺構の平面形態は長軸約2.9m、短軸約2.4mの楕円形で、検出面からの深さは約1.6mである。埋土から土師器皿・鍋、須恵器杯・甕、山茶椀が出土した。13世紀代に埋没したと考えられる。

土坑ＳＫ234　調査区中央部で検出した土坑である。北側で重複するＳＤ232より古い。遺構の平面形態は2.2～2.8mの半楕円形である。埋土から土師器皿や山茶椀が多量に出土した。山茶椀は13世紀前半のものが多く、13世紀代に埋没したと考えられる。

土坑ＳＫ225　調査区南部で検出した土坑である。遺構の平面形態は長軸4.7m、短軸2.4mの不整形な楕円形である。埋土から土師器鍋・羽釜の細片、土錘、山茶椀、陶器甕が出土している。15世紀後半の遺構と考えられる。

土坑ＳＫ233　調査区中央部で検出した土坑である。遺構の平面形態は長軸約4.8m、短軸約2.9mの楕円形である。埋土から土師器皿・羽釜、陶器皿、山茶椀などが出土している。土坑の最終的な埋没は15世紀末から16世紀初めと考えられる。

溝ＳＤ235　調査区中央部で検出した東西方向の溝である。遺構の幅は約2.4m、深さ約0.2mの浅い溝である。埋土から土師器皿・鍋・羽釜、瓦器椀、山茶椀、陶器鉢、施釉陶器などが出土しており、15～16世紀の遺構と考えられる。

土坑ＳＫ227　調査区中央部で検出した浅い土坑である。遺構の平面形態は長軸約2.9m、短軸約2.0mの不整形な楕円形である。埋土から土師器皿･羽釜、陶器鉢が出土した。16世紀頃の遺構と考えられる。

土坑ＳＫ208　調査区南部で検出した土坑である。大部分がＳＥ19に壊されている。埋土から土師器鍋が出土した。16世紀後半の遺構と考えられる。

近世の遺構

土坑ＳＫ201　調査区南端部で検出した土坑である。遺構の大部分は調査区外に続く。埋土から土師器皿・羽釜、瓦、青磁椀などが出土した。

土坑ＳＫ203　調査区南部で検出した土坑である。遺構の平面形態は長軸2.2m、短軸1.2mの不整形な楕円形の遺構である。埋土から土師器鍋･羽釜、山茶椀のほかに、瀬戸産の鉄絵皿が出土した。

土坑ＳＫ206　調査区南部で検出した土坑である。遺構の平面形態は長軸約5.0m、短軸約2.0mの楕円形である。埋土から土師器皿・鍋・羽釜、志野丸皿が出土した。

土坑ＳＫ210　調査区南部で検出した土坑である。遺構の平面形態は長軸約3.0m、短軸約2.6mである。埋土から土師器羽釜、陶器甕・鉢が出土した。

土坑ＳＫ213　調査区南部で検出した土坑である。長軸1.9m、短軸1.6mである。遺構から下駄と漆器椀が出土した。

土坑ＳＫ215　調査区南部で検出した土坑である。遺構の平面形態は長軸2.2m、短軸0.7mの楕円形である。重複するＳＤ216より新しく、ＳＤ202より古い。埋土から土師器鍋、山茶椀や天目茶椀などが出土した。

土坑ＳＫ217　調査区南部で検出した遺構である。遺構の平面形態は長軸約1.6m、短軸約1.3mの隅丸方

形である。埋土から土師器鍋･羽釜や常滑の甕が出土した。

土坑ＳＫ219　調査区南部で検出した土坑である。遺構の平面形態は長軸約1.8m、短軸約1.7mの円形である。埋土から土師器皿・鍋、山茶椀、陶器甕・鉢などが出土した。

土坑ＳＫ221　調査区中央部で検出した浅い土坑である。遺構の平面形態は長軸約1.1m、短軸約0.7mの隅丸方形である。埋土から土師器と染付椀が出土した。

土坑ＳＫ228　調査区中央部で検出した土坑である。遺構の平面形態は長軸約1.3m、短軸約0.9mの隅丸方形である。埋土から瓦・土師器焙烙・山茶椀の細片が出土した。

土坑ＳＫ229　調査区南部で検出した土坑である。遺構の平面形態は長軸1.9m、短軸約1.5mの半楕円形で、調査区の西壁付近にあり、調査区外にも続くと思われる。埋土から土師器皿・鍋、山茶椀、常滑産の鉢、天目茶椀などの細片が出土した。

溝ＳＤ232　調査区中央部で検出した溝である。重複するＳＤ235より新しい。埋土から土師器鍋や染付などの細片や陶器小皿が出土した。

溝ＳＤ214　調査区南部で検出した溝である。東西方向に走る浅い溝で、重複するＳＤ207やＳＤ209より古い。埋土から志野丸皿が出土した。

溝ＳＤ202　調査区南部で検出した溝である。調査区を東西方向に走る浅い溝で、重複するＳＤ207より古い。底レベルは西側で高く、東側で低い。このことから、溝の流れは西から東へ、つまり三泗川に向かって流れていたことが考えられる。埋土から陶器甕、施釉陶器、天目茶椀が出土している。

溝ＳＤ207　調査区南部で検出されたほぼ南北方向に走る溝である。幅は約0.4m、深さは約0.1mである。重複するＳＤ202より新しく、ＳＤ209と並行して走る。埋土から陶器小皿が出土している。

溝ＳＤ209　調査区南部で検出されたほぼ南北方向にＳＤ207と並行して走る溝である。溝の幅は約0.5m、深さは約0.2mで、ＳＤ207との間隔は溝の上端で約1.5mである。埋土からは天目茶椀が出土している。

溝ＳＤ200　調査区南部で検出した溝である。溝の幅は約1.0m、深さは約0.3mで、調査区の西壁付近にあり、そのほとんどが調査区外に続くと思われる。埋土から土師器皿・鍋、染付が出土した。

井戸ＳＥ220　調査区南部で検出した井戸である。平面形態は長軸1.84m、短軸1.48mの不整形な円形をしており、検出面からの深さは約1.5mである。井戸の構造は、木組みの井戸（曲物積上げ）[1)]である。井戸枠の形状は直径0.6m、高さ1.5mで、井筒は底板を抜いた曲物を転用して２段に組んでいた。

埋土からは、土師器鍋、陶器小皿・山茶椀、近世の陶器浅鉢が出土した。これらのことから、この井戸は近世まで存続していたと考えられる。

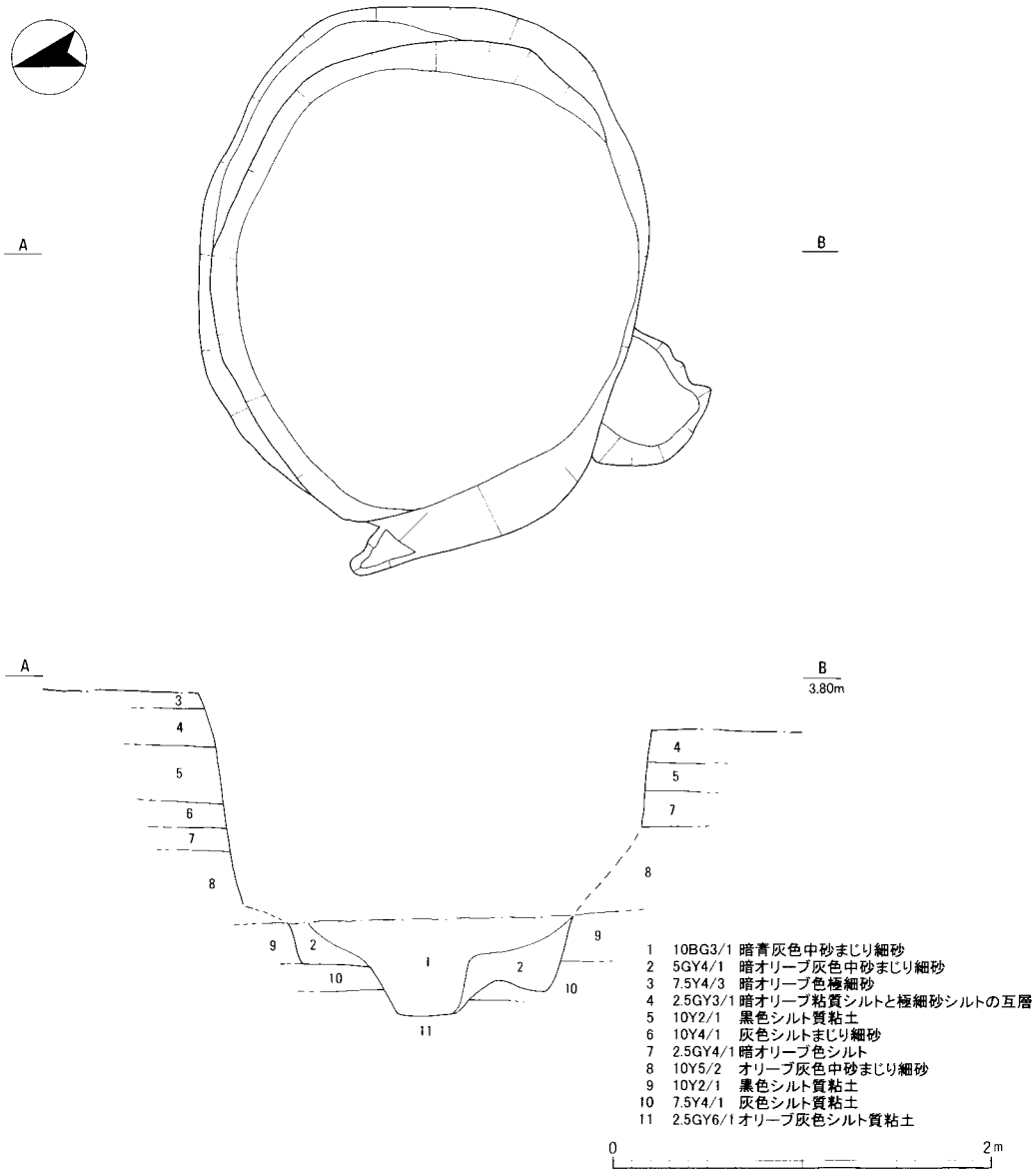
井戸ＳＥ231　調査区北部で検出した井戸で、平面形態は長軸約3.7m、短軸約2.7mの楕円形をしており、検出面からの深さは0.6mである。井戸の構造はＳＥ220と同様、木組みの井戸（曲物積上げ）である。井戸枠の形状は、直径0.5m、高さ0.6mで、井筒は底板を抜いた曲物を転用していた。ＳＥ220との違いは曲物が1段であったということである。

埋土からは土師器羽釜、山茶椀、近世の陶器浅鉢が出土しており、近世まで存続していたと考えられる。

［註］

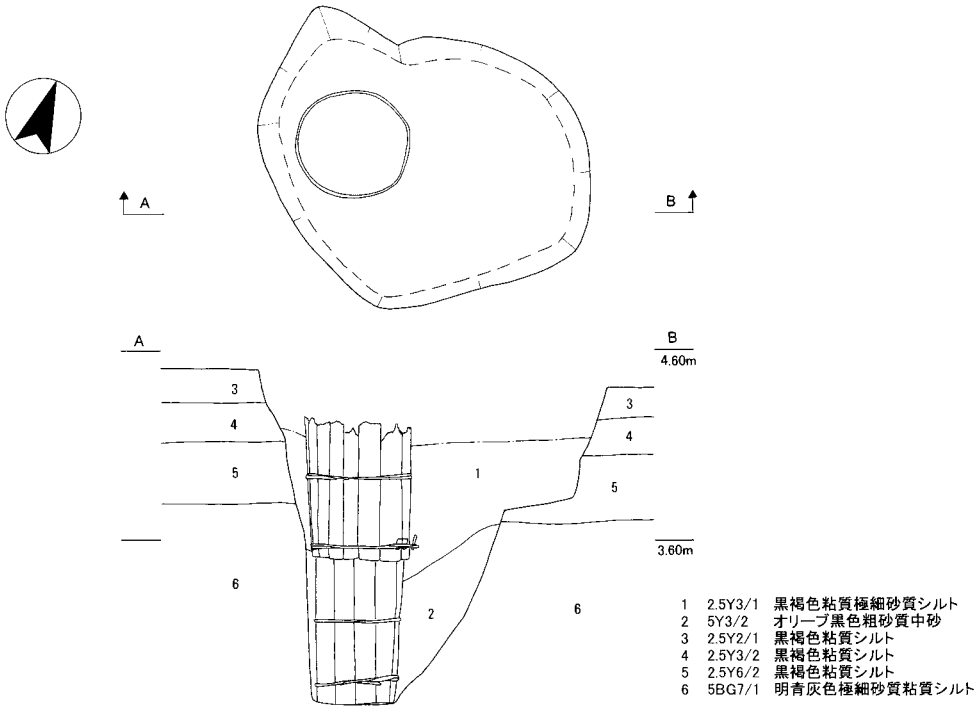
1）宇野隆夫　「井戸考」　『史林』第65巻第5号　（史学研究会 1982）

SE230

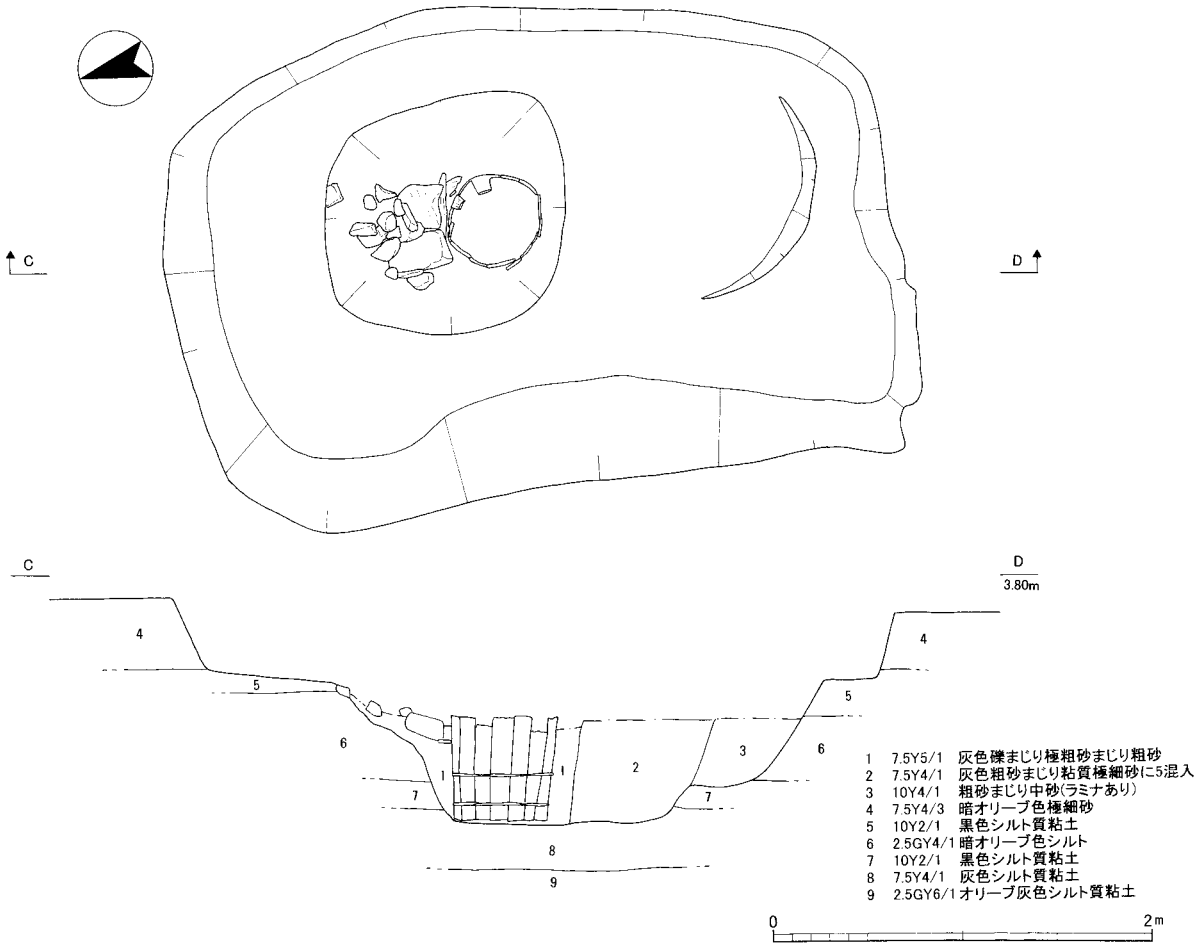


第３図　ＳＥ230平面図・土層断面図（１：40）

SE220

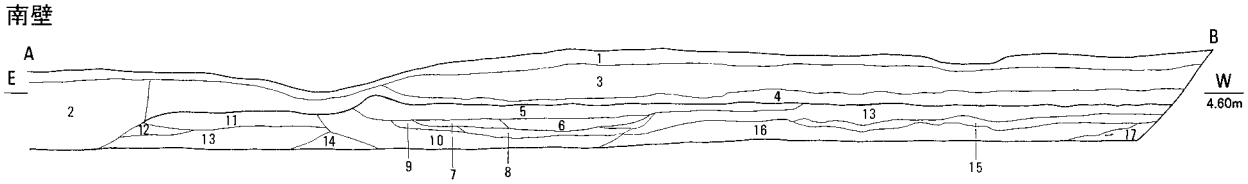


SE231

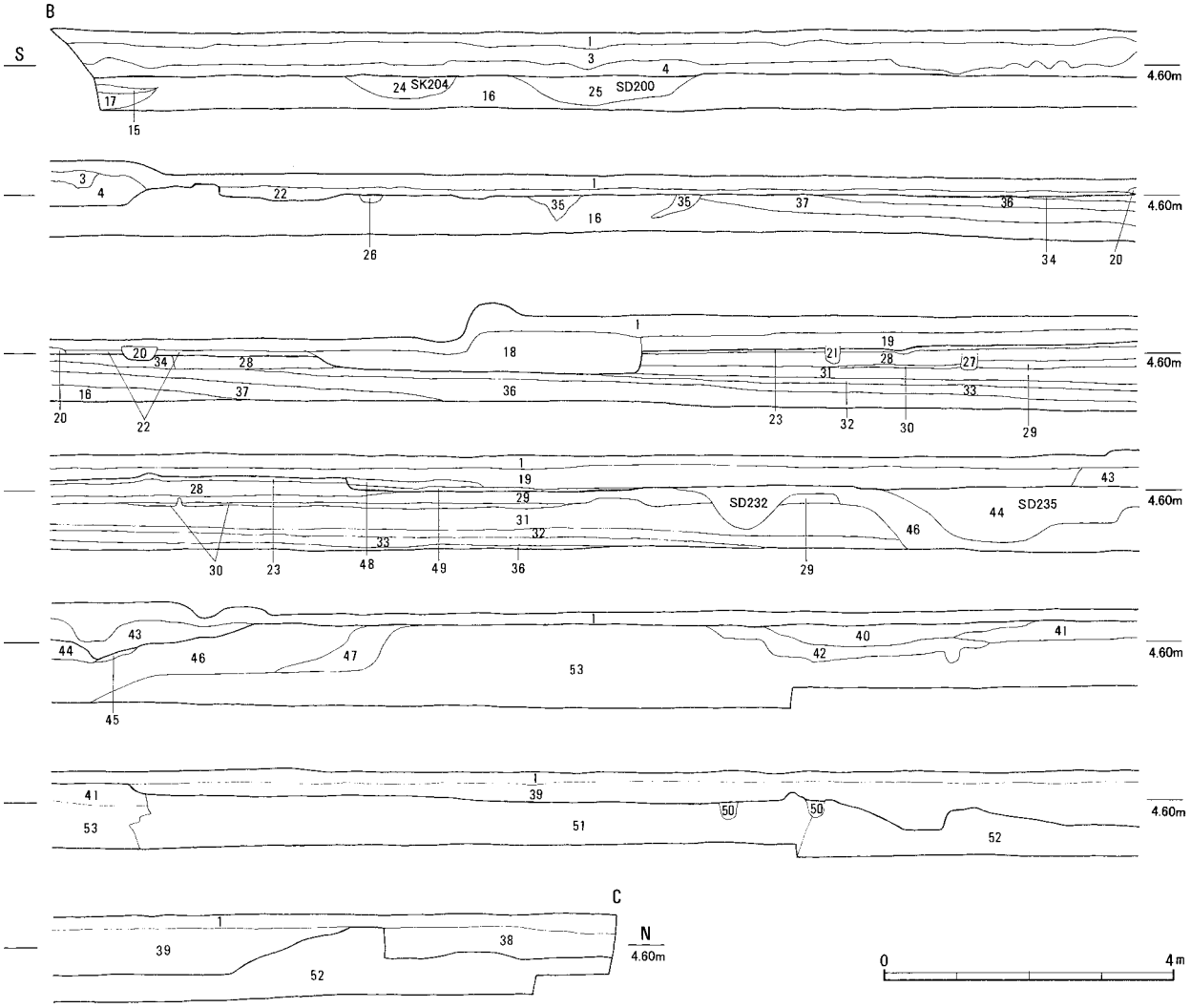


第４図　ＳＥ220・ＳＥ231平面図・見通し図・土層断面図（１：40）

南壁



西壁



1 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂まじり粘質シルト
2 第1次調査区埋土
3 4と5がブロック状に混じる
4 2.5Y4/1 黄灰色中砂質細砂
5 2.5Y4/1 黄灰色シルト(2.5Y6/2灰黄色粘質土シルトブロック含む)
6 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト(2.5Y4/1黄灰色粘土質シルトブロックと炭含む)
7 2.5Y5/1 黄灰色細砂質シルト
8 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト
9 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土
10 2.5Y6/1 黄灰色細砂と2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土の互層
11 2.5Y6/2 灰黄色シルト
12 2.5Y5/3 黄褐色細砂
13 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質中砂(西部)～細砂(東部)
14 10Y6/1 灰色シルト質細砂
15 2.5Y4/3 オリーブ褐色中砂
16 5Y6/2 灰オリーブ色シルト質細砂と細砂の互層
17 7.5Y7/2 灰白色粘質シルトとシルトの互層
18 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質細砂に19・23・28が混じる
19 23と28が混じる
20 2.5Y6/1 黄灰色細砂まじり粘質シルト
21 2.5Y3/2 黒褐色細砂まじり粘質極細砂
22 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂まじり粘質シルト(10YR6/6明黄褐色シルトブロック含む)
23 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
24 2.5Y4/1 黄灰色シルト質極細砂(7.5Y5/2灰オリーブ色極細砂ブロックと炭含む)
25 5Y5/2 灰オリーブ色細砂まじり粘質極細砂～シルトがラミナ状に堆積
26 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂まじり極細砂
27 5Y5/2 灰オリーブ色粘質極細砂
28 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト
29 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質シルトに炭混入
30 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルトに炭混入
31 5Y5/2 灰オリーブ色極細砂
32 2.5Y5/1 黄灰色と2.5Y5/3黄褐色極細砂と5Y4/1灰色粘質シルトの互層
33 5Y4/1 灰色極細砂まじり粘質シルトと36の互層
34 2.5Y5/1 黄灰色シルト(10YR6/6明黄褐色シルトブロック含む)
35 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト
36 5Y2/1 黒色粘質シルトに極細砂
37 10YR3/1 黒色粘質シルトに極細砂
38 2.5Y4/1 黄灰色中砂質細砂(2.5Y6/2灰黄色粘土質シルトブロック含む)
39 圃場整備による攪乱
40 5Y6/2 灰オリーブ色シルト
41 7.5Y5/2 灰オリーブ色粘土質シルト
42 7.5Y3/2 オリーブ黒色粘土質シルト
43 2.5Y5/4 黄褐色礫まじり粘質極細砂
44 10YR3/2 黒褐色礫まじり粘質極細砂
45 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト
46 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂まじり粘質極細砂
47 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂
48 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト(2.5Y6/6明黄褐色極細砂ブロック含む)
49 2.5Y5/2 暗灰黄色礫まじり細砂質極細砂 極めて硬化
50 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂まじり粘質細砂
51 5Y6/2 灰オリーブ色細礫まじり粗砂まじり中砂
52 7.5Y5/2 灰オリーブ色細砂
53 7.5Y5/2 灰オリーブ色と中砂～粘土質シルト

第５図　調査区土層断面図（１：100）

第６図　遺構全体図（１：400）

遺構番号	性格	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	調査次数	小地区	備考
SK1	土坑	近世	1.60	1.60	–	1次	K12～13	
SE2	井戸	15世紀末	1.60	1.20	185	1次	K14～15	
SE3	井戸	13世紀初頭～13世紀前葉	0.85	1.20	175	1次	K13	遺物細片のみ
SK4	土坑	12世紀中葉？	3.60	1.20	–	1次	K15～16	
SE5	井戸	12世紀末～13世紀初頭	3.15	2.80	340	1次	K22	
SE6	井戸	12世紀末～13世紀前葉	3.35	3.30	250	1次	L25～M26	SK23を切る
SD7	溝	12世紀末～13世紀初頭	(2.80)	0.50	40	1次	L～M28	SD18と一連
SE8	井戸	前身遺構が13世紀後葉以前	0.88	0.88	–	1次	L19	前身遺構あり
SE9	井戸	17世紀前半	2.55	2.30	250	1次	K21	
SK10	土坑	12世紀末～13世紀初頭	1.40	1.20	–	1次	K20～21	遺物細片のみ
SE11	井戸	15世紀後半	2.40	2.25	365	1次	M24	
SK12	土坑	中世後期	4.40	0.80	–	1次	K25	
13							K31	欠番
SK14	土坑	15世紀後半	1.20	1.05	90	1次	L28	SD7を切る
SD15	溝		(3.70)	0.70	–	1次	K28	SD7・18と一連か？
SE16	井戸	13世紀初頭～13世紀後葉にかかる時期	1.60	1.45	275	1次	L29	
SE17	井戸	12世紀末～13世紀初頭	1.85	1.45	375	1次	M26	
SD18	溝	12世紀中葉～13世紀初頭	(2.40)	0.60	30	1次	L～M27	SD7と一連
SE19	井戸	16世紀後半	2.35	2.10	245	1次	K30	
SK20	土坑		(2.40)	1.20	–	1次	K29	
SK21	土坑		1.20	0.80	–	1次	K28～29	
SD22	溝		(0.50)	0.20	–	1次	L26～27	SD7・18と一連か？
SK23	土坑	12世紀末～13世紀初頭	0.40	(0.20)	–	1次	L25	SE6に切られる
SE24	井戸	13世紀初頭～13世紀後葉にかかる時期	3.05	1.95	110	1次	N25～26	SE25の掘形
SE25	井戸	13世紀中葉～13世紀後葉にかかる時期	0.65	0.65	135	1次	N25～26	SE24の井筒
SD26	溝		7.20	0.40	–	1次	L22～23	
SK27	土坑		2.00	(0.40)	–	1次	L23	
28							M25	欠番
SK29	土坑		0.40	(0.40)	–	1次	L23	
SK30	土坑		0.60	(0.20)	–	1次	L23	
SK56	土坑	近世	(1.20)	(1.20)	20	2次B地区		
SD57	溝		(5.00)	(1.10)	90	2次B地区		
SZ58	落ち込み		5.60	(2.40)	–	2次B地区		
SK59	土坑		3.00	(1.60)	–	2次B地区		
SD60	落ち込み		(2.30)	(4.40)	100	2次B地区		
SD61	溝	中世	(3.00)	(3.00)	–	2次B地区		
SD62	溝	近世	(2.40)	(1.10)	40	2次B地区		
SK63	土坑		1.40	0.80	–	2次B地区		
SD64	溝		2.00	0.80	–	2次B地区		
SK65	土坑	近世	(0.50)	(1.50)	40	2次B地区		
SD66	溝		(2.60)	0.40	–	2次B地区		
SD67	溝		(2.40)	0.60	–	2次B地区		
SE68	井戸	近世	1.60	1.50	290	2次B地区		
SD170	溝	中世	(8.40)	1.60	–	3次	B10～C9	
SZ171	落ち込み	中世	2.00	1.80	–	3次	B・C9	
SE172	井戸	中世か	1.60	1.60	–	3次	C5	
SZ173	落ち込み	中世	3.80	(2.60)	–	3次	B3・4/C5・6	
SK174	土坑	中世	1.80	1.40	–	3次	C5	
SD175	溝	中世	(6.60)	1.40	–	3次	B6・7	

第1表　遺構一覧表1

遺構番号	性格	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	調査次数	小地区	備考
SR176	流路	中世	–	–	–	3次	B2/C3～7/D4～10/E6～8	
SE177	井戸	中世	2.00	1.80	–	3次	C7	
SZ178	溝	近世	(5.40)	1.20	–	3次	A10～12/B10～12	
SD179	溝	中世	(6.00)	1.00	–	3次	C10	
SD180	溝	中世	(8.40)	0.60	–	3次	B12	
SR181	流路	中世	(19.8)	6.60	–	3次	B13/C12・13/D11・12	
SE182	井戸	中世前期	3.32	2.92	312	3次	C15	
SK183	土坑	中世	1.40	1.00	–	3次	E13	
SE184	井戸	中世前期	3.20	2.80	440	3次	B12	
SD185	溝	中世	(6.40)	(1.20)	–	3次	F14・15	
SE186	井戸		2.20	2.00	–	3次		
SD200	溝	近世	(2.32)	1.00	25	5次	G～H31	
SK201	土坑	近世	(3.80)	(1.20)	36	5次	I～J32	
SD202	溝	近世	(8.60)	(1.00)	7	5次	H32～J31	
SK203	土坑	近世	2.20	1.20	23	5次	J30・31/I30・31	
SK204	土坑	近世	(1.02)	1.20	15	5次	G32	
SK205	土坑	近世	2.80	1.52	24	5次	G～H31	
SK206	土坑	近世	5.00	2.00	15	5次	H31～32	
SD207	溝	近世	1.80	0.40	8	5次	G28/H29・30/I30・31/J32	
SK208	土坑	16世紀後半	(2.60)	(1.10)	11	5次	J30	
SD209	溝	近世	(13.00)	0.50	18	5次	G29/H29・30/I31	
SK210	土坑	近世	3.00	2.60	22	5次	J29・30/K29・30	
SK211	土坑	近世	1.40	1.04	6	5次	J～K29	
SK212	土坑	近世	1.00	0.80	10	5次	I30	
SK213	土坑	近世	1.90	1.60	16	5次	J31	
SD214	溝	近世	(2.20)	0.66	12	5次	I31	
SK215	土坑	近世	(2.20)	(0.70)	12	5次	J32	
SD216	溝		(2.34)	0.30	9	5次	J32	
SK217	土坑	近世	1.60	1.28	50	5次	I29	
SK218	土坑		1.00	0.80	31	5次	H29	
SK219	土坑	近世	1.80	1.68	58	5次	H28	
SE220	井戸	近世	1.84	1.48	150	5次	G～H26・27	
SK221	土坑	近世	1.14	0.68	8	5次	H25	
SK222	土坑	近世	1.72	0.96	17	5次	G25	
SK223	土坑	近世	0.80	0.80	31	5次	G24	
224								欠番
SK225	土坑	15世紀後半	4.72	2.40	23	5次	H26	
SK226	土坑		3.20	2.00	150	5次	G23・24	
SK227	土坑	16世紀	2.86	1.94	14	5次	G～H21・22	
SK228	土坑	近世	1.26	0.94	22	5次	G21	
SK229	土坑	近世	1.90	(1.50)	63	5次	G27	
SE230	井戸	13世紀	2.86	2.36	160	5次	I14	
SE231	井戸	近世	3.70	2.72	57	5次	I17	
SD232	溝	近世	(13.20)	0.80	22	5次	G～I19/I～J18	
SK233	土坑	15世紀末～16世紀初め	4.82	2.88	53	5次	G20・21/H19～21/I19	
SK234	土坑	13世紀	2.78	2.20	14	5次	I～J19	
SD235	溝	15世紀～16世紀	(7.00)	(2.40)	26	5次	G18・19/H18/I18～19/J18～19	

第２表　遺構一覧表２

Ⅳ 出土遺物

今回の調査では弥生時代から近世にかけての遺物が出土した。以下、遺構ごとに主な出土遺物についての概略を述べる。詳細については遺物観察表を参照されたい。

ＳＥ230出土遺物（１・２）　１は土師器皿である。底部の中央がやや窪み、底部から緩やかに屈折して斜め上方に立ち上がる口縁を持つ。12世紀後半のものである。２は土師器鍋あるいは甑の把手部で古代の遺物である。

ＳＫ234出土遺物（３～15）　３・４は陶器小皿である。どちらも13世紀前葉のものである。５～15は山茶椀で５は12世紀後葉～13世紀初頭、６は11世紀末葉から12世紀前葉、その他は13世紀前葉のものである。５の底部は完存し、内面はかなり摩耗している。６・10の内面にはススが付着している。７の高台と底部外面にもわずかながらススが付着する。８は籾殻痕が確認される。９の内面は使用による摩耗が見られる。11の高台は粗雑で底部には小石を含む。底部内面には指圧痕も見られる。12の体部内面には自然釉がかかり、底部内面にはススが付着する。13・14・15の底部外面には墨書の記号が見られる。

ＳＫ225出土遺物（16～21）　16～18は山茶椀で、16は13世紀後葉から14世紀初前葉、17は13世紀前葉、18は14世紀中葉から14世紀後葉のもので平底になっている。

19は土錘。20は南伊勢系羽釜で、口縁部は内傾する。21は常滑産の甕で16世紀前半のものである。

ＳＫ233出土遺物（22～28）　22は土師器皿。胎土はやや粗く、外面底部には黒斑が見られる。23・24は陶器小皿。25・26は山茶椀。23・25は13世紀前葉、24・26は13世紀中葉である。

27・28は中北勢系羽釜である。鍔部との接合部から口縁部にかけて内傾する。口縁部下方には焼成前穿孔による円孔が見られる。どちらも、15世紀後半のものに相当する。27は鍔部外面が丸味を帯びる。28の口縁上部は外反している。

ＳＤ235出土遺物（29～41）　土師器皿・鍋・羽釜、山茶椀、陶器鉢、施釉陶器など、中世後期から近世までの遺物の細片が多量に出土しているほか、古代の遺物も若干混入する。

29は弥生土器壺の頸部である。櫛により波状文・直線文と刺突文が施される。30・31は瓦器椀である。体部内面にはミガキが施されているが外面には見られないことから13世紀代であろう。

32～35は山茶椀である。全て13世紀前葉のものである。32は底部内面が摩耗しており、底部外面には墨書がある。33・34の底部外面には墨書の記号がある。

36～39は南伊勢系鍋、40は南伊勢系羽釜である。いずれも15世紀後半から16世紀前半のものである。41は弥生時代の扁平片刃石斧で混入品である。

ＳＫ203出土遺物（42～44）　42は陶器折縁皿で、底部内面には鉄絵が描かれており、底部外面にはススが付着する。43・44は陶器丸皿である。43は体部に丸味を帯びている。44の体部はやや外反している。いずれも17世紀後半のものである。

ＳＫ201出土遺物（45～49）　土師器皿・羽釜、瓦、青磁椀が出土している。45は土師器皿である。46は須恵器杯身で６世紀初めのものである。47は陶器の底部を利用した加工円盤で、灰色素地に灰釉が施される。側面は打ち欠いた後、研磨されている。内面にはトチン痕があり、外面には墨書がみられる。48は山茶椀で13世紀前葉のものである。49は中北勢系の羽釜で15世紀後半のものである。口縁部に２つ円孔があり、体部外面鍔部より下にはススが付着する。

ＳＫ206出土遺物（50）　志野丸皿で17世紀後半のものである。

ＳＫ210出土遺物（51）　天目茶椀の底部を利用した加工円盤である。側面は研磨されている。

ＳＫ215出土遺物（52）　天目茶椀で17世紀後半のものである。体部は直線的に開き、口唇部は直立よりやや開き気味で端部は外反する。

ＳＫ219出土遺物（53）　常滑産の練鉢である。体部内面は使用により摩耗している。16世紀後半のものである。

ＳＫ229出土遺物（54）　13世紀中葉の山茶椀である。平底で、体部はほぼ直線的である。胎土はやや粗く、0.1～0.7㎝程の石を含む。

ＳＫ213出土遺物（55・56）　55は下駄である。一本木で仕上げられ、２本の歯が突出する。歯は使用により摩耗しており、特に後歯の摩耗は著しい。56は漆器椀である。残存状態は非常に悪い。高台は低く、比較的小振りである。体部内面は黒色漆を塗布した後、赤色漆を塗布している。体部外面は黒色漆を塗布している。

ＳＤ232出土遺物（57）　13世紀中葉の陶器小皿。

ＳＤ214出土遺物（58）　17世紀前半の志野丸皿である。

ＳＤ202出土遺物（59～61）　59は13世紀中葉の陶器小皿。扁平な形で、口縁の端部は尖る。60は17世紀後半の天目茶椀。体部は直線的に開き、口唇部は直立、口縁部は外反する。61は常滑産の火桶で17世紀から18世紀のものである。

ＳＤ207出土遺物（62）　灰釉皿の底部である。底部内面には輪ドチがみられる。さらに底部外面には重ね焼きのトチン痕が見られる。17世紀前半のものである。

ＳＤ209出土遺物（63・64）　63・64は天目茶椀の底部。どちらも17世紀前半のものである。鉄釉が施され、高台は露胎である。

ＳＥ220出土遺物（65～69）　65は12世紀後葉から13世紀初頭の陶器小皿。底部が突出し、体部が丸味を帯びている。66～68は山茶椀の底部で66・67は13世紀前葉、68は13世紀中葉のものである。

69は信楽の擂鉢である。内外面ともにロクロナデがみられ、内面には４条単位のすり目がみられる。15世紀中葉のものである。

ＳＥ231出土遺物（70～72）　70は13世紀前葉陶器小皿。若干丸味を帯びた体部で、器高は低い。内面は使用による摩耗が認められ、底部外面には墨書が見られる。71は山茶椀底部で13世紀前葉のものである。72は常滑産の壺底部である。

Ⅰ29pit2出土遺物（73）　13世紀前葉の山茶椀である。高台は大部分が剥離しているが、残存部分には籾殻痕が見られる。

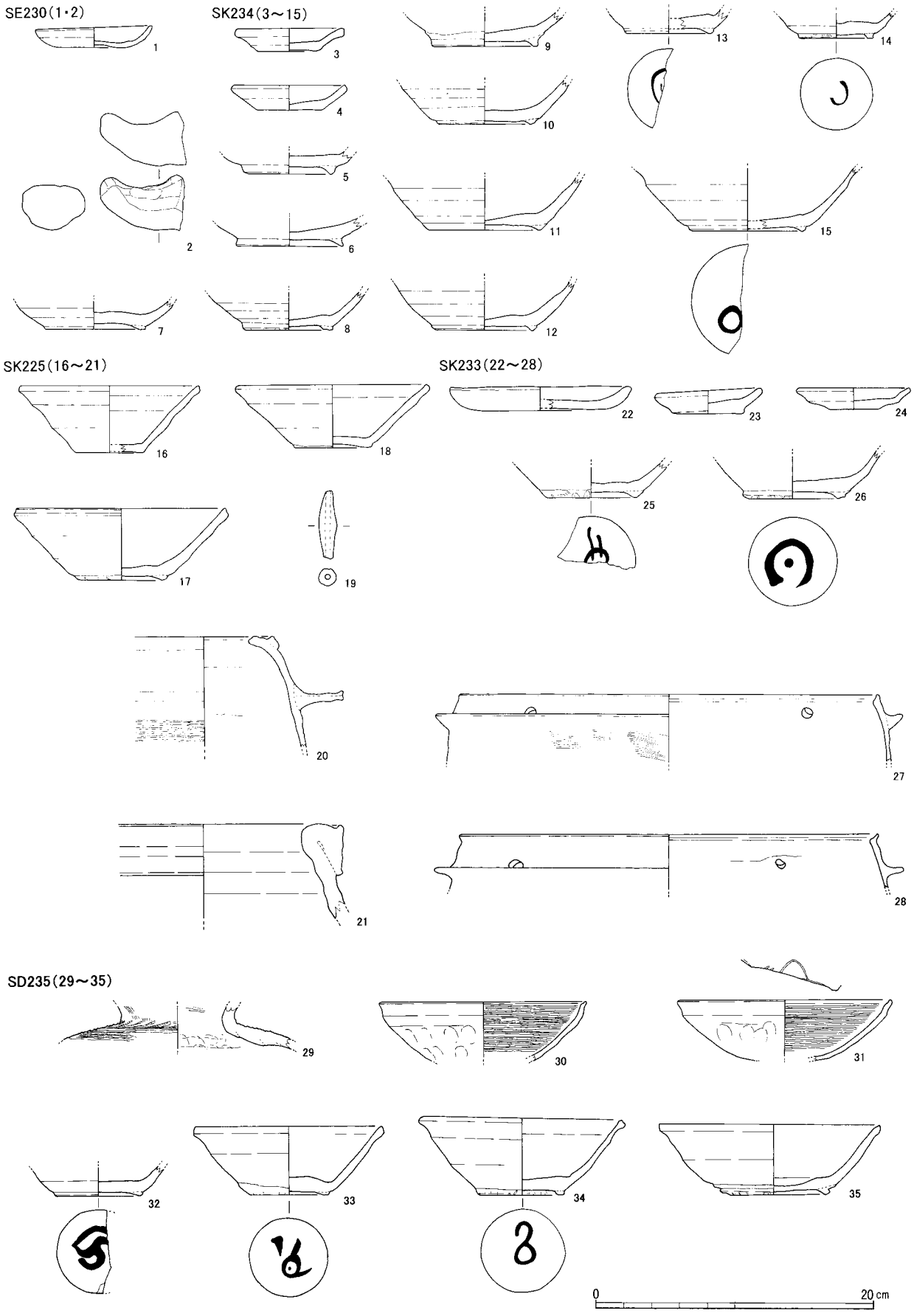
Ｊ30pit3出土遺物（74）　中北勢系の羽釜である。口縁は折り返し、鍔部より下はススが多量に付着する。

Ⅰ30pit1出土遺物（75）　鉄釘である。同じpitからは13世紀代の土師器片が出土しており、中世の釘の可能性がある。

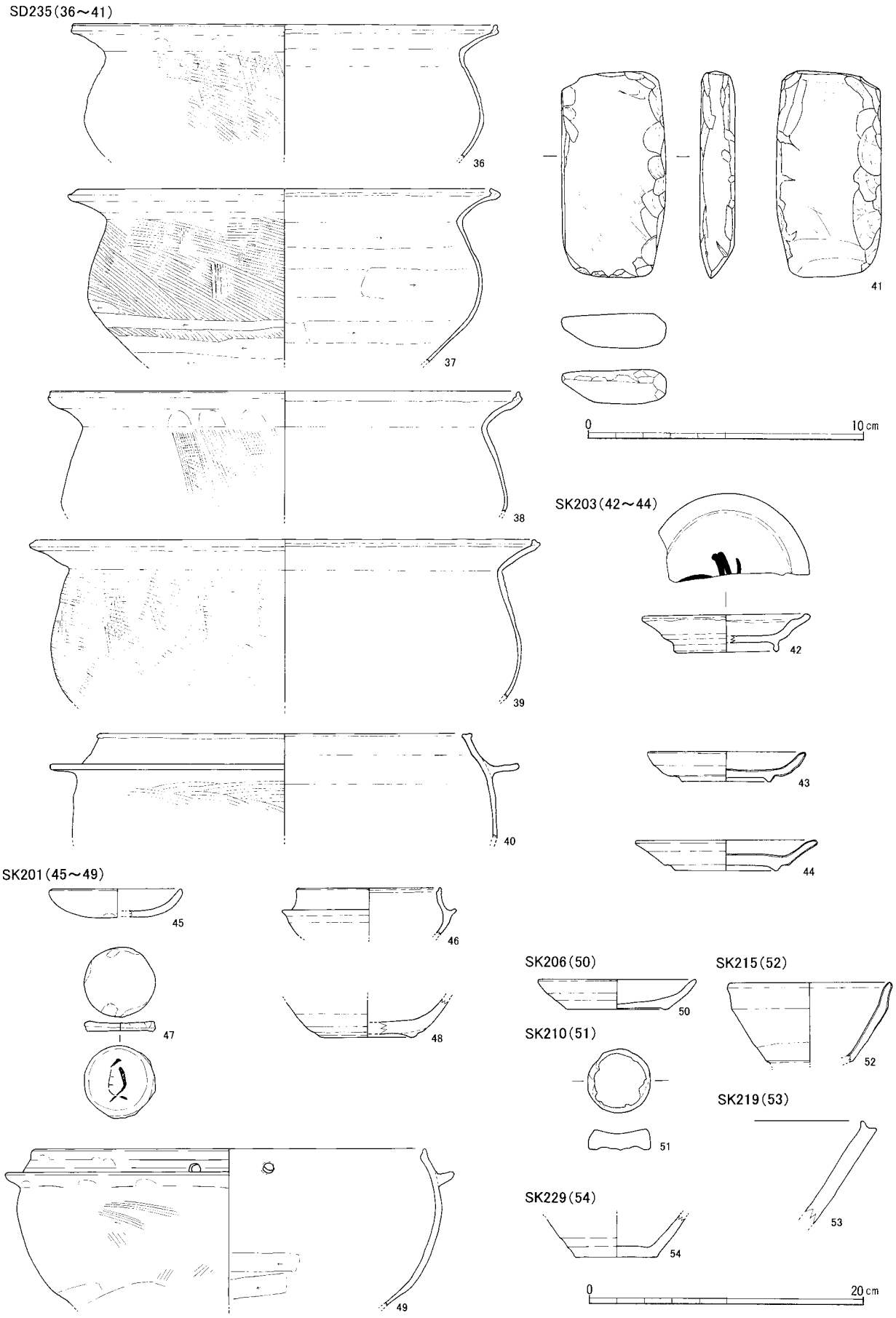
包含層出土遺物（76～99）　76は13世紀前半の陶器小皿である。胎土は粗く、小石や３㎜程の砂粒が付着する。77は美濃産の小皿である。

78～80は山茶椀である。13世紀前半のもので高台は低く、籾殻痕が見られる。79の胎土は粗く、歪みも大きい。80の体部は直線的に開き、自然釉も付着する。81は12世紀後葉から13世紀初頭の底部を利用した加工円盤である。内面は摩耗が認められ、側面は打ち欠いている。82は13世紀中葉の陶器小皿である。83は鉄絵鉢である。口縁は外反し、折縁状になる。体部側面は丸味を帯び、内面には鉄絵が描かれている。17世紀後半のものである。84は南伊勢系の焙烙である。85は土師器小皿である。平らな底部と立ち上がるような体部で、器壁は薄い。86は13世紀前葉の陶器小皿。87・88は13世紀中葉の陶器小皿である。89は志野丸皿で17世紀前半のものである。90～99は山茶椀である。90・92～97は13世紀前葉のもので、90は全体に丸味を帯び、底部内面は使用による摩耗が見られる。92～94は底部外面に墨書の記号がある。95の体部は直線的で、高台には籾殻痕がある。96は山茶椀底部で、粗雑化した高台には籾殻痕、外面には糸切り痕と墨書が見られる。内面には指圧痕がはっきり認められる。97の体部は丸味を帯び、口縁部はわずかに外反する。91は13世紀中葉のもので、体部は直線的である。口縁部から内面にかけて自然釉が付着する。高台には籾殻痕が明瞭に見られる。98は12世紀中葉のもので、底部内面に重ね焼き輪ドチの痕がみられる。99は12世紀後葉から13世紀初頭のもので、高台には砂粒痕が見られる。

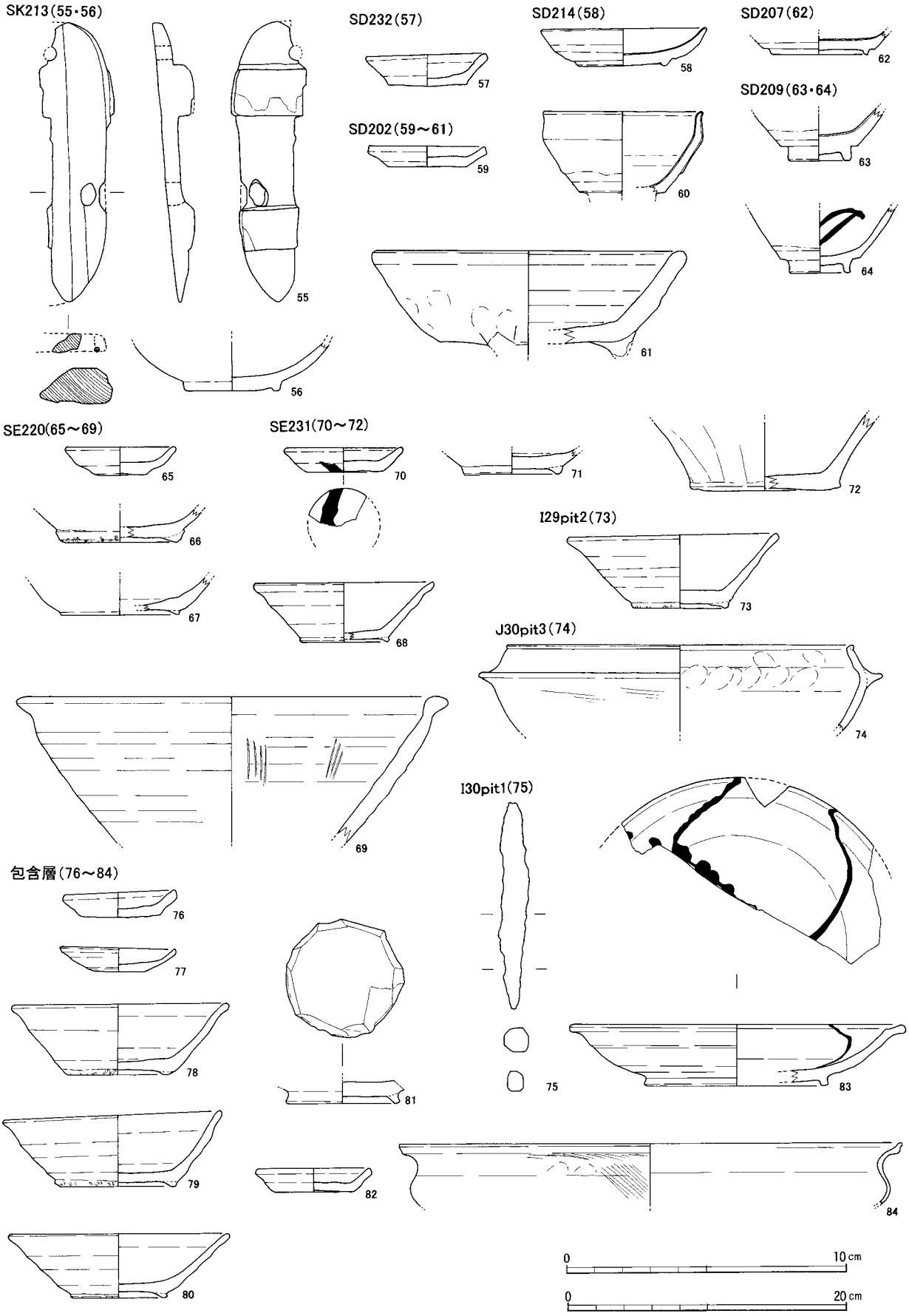
表採遺物（100～118）　100は土師器小皿。弧状の体部で器壁は厚い。101は須恵器高杯。脚部に透孔が３ヶ所ある。６世紀代のものである。102～106は陶器小皿である。102は13世紀前葉のもので、器高は低く扁平で、体部は直線的である。103は14世紀中葉から14世紀後葉、105は13世紀前葉、104・106は13世紀中葉のものである。



第７図　出土遺物実測図１（1:4）

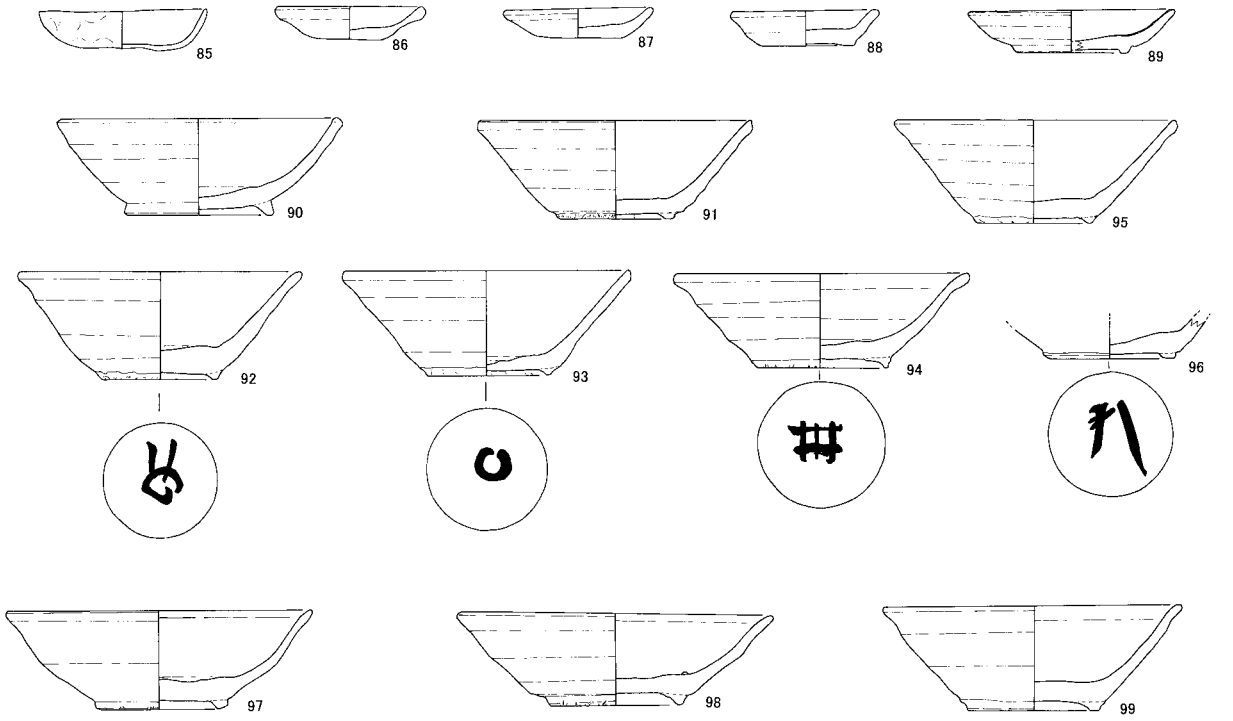


第８図　出土遺物実測図２（1:4）（41は1:2）

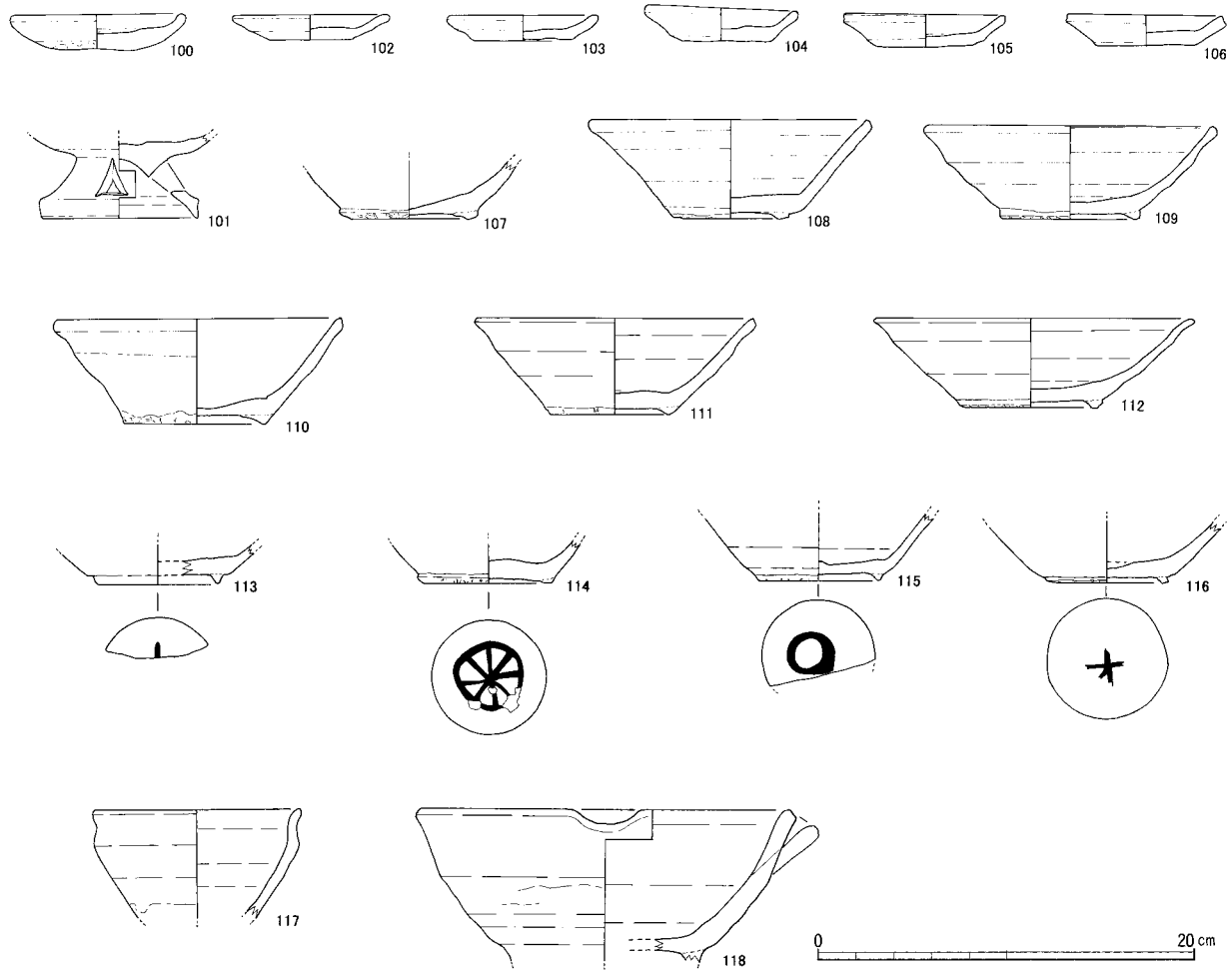


第９図　出土遺物実測図３（1：4）（75は1：2）

包含層(85～99)



表採(100～118)



第10図　出土遺物実測図４（1:4）

107～116は山茶椀である。107・109は13世紀前葉のもので、107の底部内面には墨痕がある。108・110・111は13世紀中葉のもので、底部内面は使用により摩耗している。111は底部内面に輪ドチによる重ね焼き痕があり、体部の一部は焼けた痕がある。未使用のものと思われる。112は12世紀後葉から13世紀初頭のものである。113～116は底部の一部で、外面にうっすら墨書の記号が見られる。113・114は13世紀中葉、115・116は13世紀前葉のものである。117は17世紀後半の天目茶椀である。118は常滑の片口鉢で13世紀前半のものである。

本書における出土遺物の分類・編年については以下の文献を参考として記述を行った。また、陶器山茶椀・小皿の一部と天目茶椀については愛知学院大学藤澤良祐氏に実見いただきご教示を得た。

愛知県史編さん委員会
・『愛知県史 別編窯業２ 中世・近世 瀬戸系』
愛知県 2007
伊藤裕偉
・「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と甕そのデザイン』 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会 1996
・「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie History』vol.1 三重歴史文化研究会1990
・「土師器皿の変遷」『北畠氏館跡９』―多気北畠氏遺跡第26次調査・北畠氏館跡総括編―三重県美杉村教育委員会 2005
畑中英二
・『信楽焼の考古学的研究』 サンライズ出版 2003
中野晴久
・「産地別による生産技術の展開からの編年 常滑・渥美系」 『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』 全国シンポジウム「中世窯業の諸相」実行委員会 2005
福田典明
・「伊賀地域における瓦器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究』ＸＸ 2006
藤澤良祐
・「瀬戸古窯址群Ⅰ」『研究紀要Ⅰ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1982
・「施釉陶器生産技術の伝播」 『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』 全国シンポジウム「中世窯業の諸相」実行委員会 2005
三重県埋蔵文化財センター
・『嶋抜Ⅱ』2000

報告番号	実測番号	器種	出土地区 出土遺構	法量	調整・技法	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	304	土師器 皿	I14 SE230	口8.2 器高1.6	口:ヨコナデ 内:ナデ 外:ナデ、オサエ	密	良	浅黄橙10YR8/3	7/12	
2	303	土師器 把手	I14 SE230	−	オサエ、ナデ	やや粗	良	淡黄2.5Y8/3	把手のみ	
3	708	陶器 小皿	I19 SK234	口7.5	口内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、糸切り痕	やや粗	良	灰白5Y8/1	完存	尾張型第6型式
4	907	陶器 小皿	I19 SK234	口8.0	口内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、糸切り痕	やや密	良	灰白5Y7/1	1/3	尾張型第6型式
5	804	陶器 山茶椀	I19 SK234	底6.0	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、貼付高台ナデ、 糸切り痕	密	良	灰N6/	底完存	転用硯？ 渥美型第5型式
6	908	陶器 山茶椀	I19 SK234	底7.6	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、貼付高台ナデ、 糸切り痕	やや密	良	灰白N7/	底1/3	内面ススキ付着 尾張型第3型式
7	805	陶器 山茶椀	I19 SK234	口8.0 底6.8 器高1.8	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、貼付高台ナデ、 糸切り痕	やや密	良	灰N6/	底7/12	底外面ススキ付着 尾張型第6型式
8	802	陶器 山茶椀	I19 SK234	底6.1	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、貼付高台ナデ、 糸切り痕	やや粗	良	灰N6/	底ほぼ完存	籾殻痕 尾張型第6型式
9	806	陶器 山茶椀	I19 SK234	底7.6	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、貼付高台ナデ、 糸切り痕	やや密	良	灰白5Y7/1	底1/3	尾張型第6型式
10	803	陶器 山茶椀	I19 SK234	底6.5	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、貼付高台ナデ、 糸切り痕	やや密	良	灰白5Y7/1	底完存	内面ススキ付着 尾張型第6型式
11	801	陶器 山茶椀	I19 SK234	底8.0	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、貼付高台ナデ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白5Y7/1	1/3	尾張型第6型式
12	906	陶器 山茶椀	I19 SK234	底6.8	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、貼付高台ナデ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白N7/	1/3	内面ススキ付着 尾張型第6型式
13	905	陶器 山茶椀	I19 SK234	底6.0	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、貼付高台ナデ、 糸切り痕	やや密	良	灰白5Y7/1	底1/3	墨書あり 尾張型第6型式
14	807	陶器 山茶椀	I19 SK234	底5.2	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、貼付高台ナデ、 糸切り痕	やや密	良	灰白5Y7/1	底完存	籾殻痕 墨書あり 尾張型第6型式
15	904	陶器 山茶椀	I19 SK234	底8.0	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、貼付高台ナデ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白5Y7/1	1/3	墨書あり 尾張型第6型式
16	602	陶器 山茶椀	I26 SK225	口12.7 底4.8 器高4.8	口内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、糸切り痕	粗	やや不良	灰黄2.5Y7/2	口1/6	尾張型第8型式
17	704	陶器 山茶椀	H26 SK225	口14.8 底5.8 器高5.1	口内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、糸切り痕	やや粗	良	灰白5Y8/1	底完存	尾張型第6型式
18	601	陶器 山茶椀	H26 SK225	口13.4 底5.4 器高4.5	口内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、糸切り痕	やや粗	やや不良	灰黄2.5Y7/2	口1/6	尾張型第9型式
19	703	土製品 土錘	I26 SK225	4.8×1.2 重さ5.0g	ナデ	やや密	良	灰黄褐10YR6/2	ほぼ完存	
20	604	土師器 羽釜	HI26 SK225	−	口:ヨコナデ 内:ナデ 外:ハケ	粗	良	にぶい黄橙10YR6/3	小片	内面ススキ付着 南伊勢系
21	1103	陶器 甕	H26 SK225	−	ロクロナデ	やや粗	良	にぶい赤褐7.5R4/3	口縁小片	把手部ススキ付着 ハケ10本/cm 常滑型11型式
22	706	土師器 皿	H20 SK233	口12.6 器高1.6	ナデ	やや粗	良	灰白10YR8/2	1/4	
23	705	陶器 小皿	G21 SK233	口7.5 底1.9 器高1.4～1.8	口内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、糸切り痕	粗	良	灰白5Y8/1	完存	尾張型第6型式
24	903	陶器 小皿	I19 SK233	口8.0 底3.6 器高1.5	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、糸切り痕	やや密	良	灰白2.5Y7/1	1/3	尾張型第7型式
25	707	陶器 山茶椀	H21 SK233	底6.4	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、貼付高台ナデ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白5Y7/1	底1/4	籾殻痕 墨書あり 尾張型第6型式
26	709	陶器 山茶椀	G20 SK233	底6.4	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、貼付高台ナデ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白5Y7/1	底完存	籾殻痕 墨書あり 尾張型第7型式
27	901	土師器 羽釜	G20 SK233	口30.0	口:ヨコナデ 内:調整不明 外:ハケ	密	良	橙7.5YR6/8	口1/4	口縁部孔2 外面ススキ付着 中北勢系
28	902	土師器 羽釜	G20 SK233	口30.0	口:ヨコナデ 内外:ナデ	密	良	灰白10YR8/1	口1/6	口縁部孔2 中北勢系
29	810	弥生土器 壺	H18 SD235	−	内:ナデ、オサエ 外:ハケ、刺突文、波状文、直 線文	やや粗	良	にぶい橙7.5YR6/4	頸1/3	混入か
30	1101	瓦器 椀	J19 SD235	口13.9	口:ヨコナデ 内:ミガキ 外:ナデ、オサエ	やや密	良	灰N3/	口1/4	
31	808	瓦器 椀	J19 SD235	口14.0	口:ヨコナデ 内:ミガキ 外:ナデ、オサエ	やや密	良	灰N4/	口1/4	

第３表　出土遺物観察表１

報告番号	実測番号	器種	出土地区 出土遺構	法量	調整・技法	胎土	焼成	色調	残存	備考
32	809	陶器 山茶椀	H19 SD235	底6.0	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白2.5Y7/1	底7/12	籾殻痕 墨書あり 尾張型第6型式
33	710	陶器 山茶椀	H19 SD235	口13.3 底5.6 器高4.9	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	やや粗	良	灰白5Y8/1	底完存	籾殻痕 墨書あり 尾張型第6型式
34	1303	陶器 山茶椀	H19 SD235	口14.2 底6.0 器高5.7	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白N7/	完存	籾殻痕 墨書あり 尾張型第6型式
35	1302	陶器 山茶椀	I19 SD235	口15.8 底6.9 器高5.2	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白2.5Y8/1	完存	籾殻痕 尾張型第6型式
36	1102	土師器 鍋	J19 SD235	口30.6	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	やや粗	良	浅黄橙10YR8/3	口1/6	ﾊｹ5本/cm 外面ｽｽ付着 第4段階c型式
37	1001	土師器 鍋	J19 SD235	口30.0	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ｹｽﾞﾘ 外:ﾊｹ、ｹｽﾞﾘ	やや粗	良	にぶい黄橙10Y6/3	口1/4	ﾊｹ5本/cm 外面ｽｽ付着 第4段階c型式
38	1201	土師器 鍋	J1819 SD235	口30.4	口内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	やや粗	良	にぶい黄橙10Y6/4	口1/12	ﾊｹ5本/cm 外面ｽｽ付着 第4段階c型式
39	1002	土師器 鍋	J19 SD235	口36.3	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ｹｽﾞﾘ 外:ﾊｹ、ｹｽﾞﾘ	やや粗	良	灰黄褐10YR4/2	口1/4	ﾊｹ4本/cm 外面ｽｽ付着 第4段階c型式
40	1304	土師器 羽釜	J19 SD235	口27.0	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	やや粗	良	浅黄橙10YR8/3	口1/6	ﾊｹ4本/cm 内面ｽｽ付着 第4段階
42	204	陶器 折縁皿	I30 SK203	口11.8 底7.2 器高2.65	口:施釉、ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	素地:灰白2.5Y8/2 釉:浅黄5Y7/3 柄の色:灰黄褐	5/12	高台ｽｽ付着 登窯第3小期
43	102	陶器 皿	I30 SK203	口11.3 底6.4 器高2.15	口内:施釉 外:施釉、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ、削り出 し高台	密	良	素地:灰白N7/ 釉:灰白5Y7/1	1/6	ﾄﾁﾝ痕 登窯第3小期
44	101	陶器 皿	I30 SK203	口12.8	施釉	密	良	素地:灰白2.5Y7/1 釉:灰白5Y7/2	7/12	ﾄﾁﾝ痕4箇所 登窯第3小期
45	206	土師器 皿	I32 SK201	口9.4	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口3/12	
46	205	須恵器 杯身	I32 SK201	口10.4	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰N4/	口1/4	TK47
47	104	陶器 加工円盤	I32 SK201	5.1×5.1 重さ26.4g	施釉、側面打欠後研磨	密	良	素地:灰白2.5Y8/1 釉:灰白7.5Y7/2	完存	墨書あり ﾄﾁﾝ痕
48	203	陶器 山茶椀	I32 SK201	底6.4	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、貼付高台 ﾅﾃﾞ	密	良	灰白5Y7/1	底1/4	尾張型第6型式
49	201	土師器 羽釜	I32 SK201	口28.4	口:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ 外:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ、ｹｽﾞﾘ	密	良	褐7.5YR4/3	1/4	口縁部孔2 外面ｽｽ付着 中北勢系
50	701	陶器 皿	H31 SK206	口11.4 器高2.2	口内:ﾅﾃﾞ 外:ｹｽﾞﾘ	やや粗	良	素地:灰白2.5Y8/2 釉:灰白2.5Y8/2	1/6	全体施釉 登窯第3小期
51	702	陶器 加工円盤	J29 SK210	4.5×4.5 重さ38.4g	施釉、ｹｽﾞﾘ 側面研磨	やや粗	良	素地:灰白2.5Y8/2 釉:黒5Y2/1	完存	
52	401	陶器 天目茶椀	IJ32 SK215	口11.8	口内:施釉 外:ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	密	良	素地:灰白2.5Y8/2 釉:灰褐7.5Y4/2	口5/12	登窯第3小期
53	202	陶器 練鉢	H28 SK219	–	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 内:調整不明 外:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ	やや密	良	橙2.5YR6/6	口1/12	常滑12型式
54	103	陶器 山茶椀	G27 SK229	底6.0	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	やや粗	良	灰白10YR7/1	底1/6	尾張型第7型式
57	406	陶器 小皿	I18 SD232	口8.6 底5.6 器高2.2	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	密	やや良	灰白10YR7/1	完存	渥美型第7型式
58	408	陶器 皿	I31 SD214	口11.6 底6.2 器高2.7	口内:施釉 外:ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	密	良	灰白2.5Y8/1	底完存	登窯第2小期
59	407	陶器 小皿	J31 SD202	口8.3 底5.6 器高1.5	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	やや密	良	灰白10YR7/1	1/3	尾張型第7型式
60	403	陶器 天目茶椀	J31 SD202	口11.2	口内:施釉 外:ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ、施釉	密	良	素地:灰白10Y7/1 釉:黒褐5YR2/1	口1/3	登窯第4小期
61	409	陶器 火桶	J31 SD202	口21.8	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	やや密	良	黒褐5YR3/1	口1/4	常滑
62	405	陶器 小皿	I31 SD207	底6.8	内:施釉 外:施釉、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	密	良	素地:灰白5Y7/1 釉:灰ｵﾘｰﾌﾞ5Y6/2	底7/12	ﾄﾁﾝ痕 登窯第2小期
63	404	陶器 天目茶椀	I31 SD209	底4.4	内:施釉 外:施釉、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ、削り出 し高台	やや密	良	素地:灰白5Y8/1 釉:黒5Y2/1	底完存	登窯第2小期
64	402	陶器 天目茶椀	H30 SD209	底4.3	内:施釉 外:施釉、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ、削り出 し高台	密	良	素地:灰白10YR8/2 釉:にぶい赤褐 2.5YR4/3	底完存	登窯第2小期
65	308	陶器 小皿	H26 SE220	口7.6 底3.0 器高2.0	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	やや密	良	灰白2.5Y7/1	5/12	尾張型第5型式

第４表　出土遺物観察表２

報告番号	実測番号	器種	出土地区 出土遺構	法量	調整・技法	胎土	焼成	色調	残存	備考
66	306	陶器 山茶椀	H26 SE220	底8.0	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや密	良	黄灰2.5Y6/1	底1/4	籾殻痕 尾張型第6型式
67	307	陶器 山茶椀	G26 SE220	底8.4	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや密	良	灰白2.5Y7/1	底1/6	籾殻痕 尾張型第6型式
68	305	陶器 山茶椀	G27 SE220	口12.8 底6.0 器高4.2	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、糸切り痕	やや粗	良	黄灰2.5Y6/1	1/6	内面ｽｽ付着 尾張型第7型式
69	301	陶器 擂鉢	H26 SE220	口29.2	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	粗	良	灰白10YR8/2	口1/12	信楽
70	309	陶器 小皿	I19 SE231	口8.2 底5.2 器高1.7	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	やや密	良	灰白5Y7/1	1/2	墨書あり 尾張型第6型式
71	310	陶器 山茶椀	I17 SE231	底6.5	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや密	良	灰5Y6/1	底1/2	転用硯？ 尾張型第6型式
72	302	陶器 壺	I19 SE231	底10.7	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾅﾃﾞ	やや粗	良	灰褐7.5YR5/2	底1/3	常滑
73	1401	陶器 山茶椀	I29 Pit2	口14.9 底6.9 器高5.2	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや密	良	灰白10YR7/1	1/2	籾殻痕 尾張型第6型式
74	1402	土師器 羽釜	J30 Pit3	口24.8	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:ﾊｹ	やや密	良	橙5YR6/6	口1/2	外面ｽｽ付着
76	1604	陶器 小皿	I19 包含層	口7.7 底5.7 器高2.0	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	粗	良	灰白2.5Y7/1	ほぼ完存	尾張型第6型式
77	1607	陶器 小皿	G18 包含層	口8.2 底3.6 器高1.8	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	密	良	素:灰白2.5Y7/1 釉:にぶい赤褐5YR4/4	2/3	美濃
78	1601	陶器 山茶椀	I18 包含層	口15.2 底7.0 器高5.2	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白5Y7/1	3/5	籾殻痕 尾張型第6型式
79	1602	陶器 山茶椀	I19 包含層	口15.8 底8.0 器高5.4	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	粗	良	灰白5Y7/1	2/5	籾殻痕 尾張型第6型式
80	1603	陶器 山茶椀	I19 包含層	口15.4 底6.6 器高4.6	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや密	良	灰白5Y7/1	1/3	籾殻痕 尾張型第6型式
81	1606	陶器 加工円盤	I17 包含層	底7.6 重さ115.0g	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	密	良	灰白2.5Y7/1	底完存	円形加工品 渥美型第5型式
82	1605	陶器 小皿	H26 包含層	口8.0 底5.6 器高1.7	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	密	良	灰白5Y7/1	1/2	尾張型第7型式
83	1502	陶器 鉢	G25・26 包含層	口23.4 底12.4 器高4.4	口外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、施釉 内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、削り出し高台	やや密	良	素地:灰白5Y8/2 釉:ｵﾘｰﾌﾞ黄5Y6/3	1/3	登窯第3小期
84	1501	土師器 焙烙	H26 包含層	口36.0	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ	密	良	にぶい橙7.5YR7/3	口1/6	外面ｽｽ付着 南伊勢系
85	2008	土師器 小皿	包含層	口8.8 器高2.0	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ 外:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	やや密	良	灰白2.5Y8/1	9/10	
86	2006	陶器 小皿	包含層	口7.7 底3.4 器高1.7	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	やや密	良	灰白10YR7/1	完存	尾張型第6型式
87	2007	陶器 小皿	包含層	口7.7 底4.5 器高1.5	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	やや密	良	灰白10YR7/1	完存	尾張型第7型式
88	2009	陶器 小皿	包含層	口7.7 底5.0 器高1.9	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	やや密	良	灰白2.5Y7/1	完存	尾張型第7型式
89	2106	陶器 皿	包含層	口10.8 底5.7 器高2.3	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ、削り 出し高台	やや密	良	素地:褐灰10YR6/1 釉:灰白2.5Y8/1	1/2	登窯第2小期
90	2103	陶器 山茶椀	包含層	口14.6 底7.5 器高5.1	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや密	良	褐灰10YR6/1	底完存	籾殻痕 尾張型第6型式
91	2104	陶器 山茶椀	包含層	口14.4 底6.0 器高5.2	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白10YR7/1	底完存	籾殻痕 尾張型第7型式
92	2002	陶器 山茶椀	包含層	口14.8 底6.0 器高5.7	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや密	良	灰白2.5Y7/1	4/5	籾殻痕 墨書あり 尾張型第6型式
93	2003	陶器 山茶椀	包含層	口15.0 底6.5 器高5.5	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや粗	良	黄灰2.5Y6/1	底完存	籾殻痕 墨書あり 尾張型第6型式
94	2001	陶器 山茶椀	包含層	口15.1 底6.8 器高5.0	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白2.5Y7/1	ほぼ完存	籾殻痕 墨書あり 尾張型第6型式
95	2005	陶器 山茶椀	包含層	口14.6 底6.0 器高5.4	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	密	良	灰白2.5Y7/1	4/5	籾殻痕 尾張型第6型式
96	2004	陶器 山茶椀	包含層	底5.6	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや密	良	灰白10YR7/1	底完存	籾殻痕 墨書あり 尾張型第6型式
97	2105	陶器 山茶椀	包含層	口16.0 底6.8 器高5.2	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや密	やや不良	灰白10YR7/1	2/5	籾殻痕 尾張型第6型式

第５表　出土遺物観察表３

報告番号	実測番号	器種	出土地区 出土遺構	法量	調整・技法	胎土	焼成	色調	残存	備考
98	2101	陶器 山茶椀	包含層	口16.4 底7.0 器高4.9	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや密	良	灰白7.5Y7/1	完存	籾殻痕 尾張型第4型式
99	2102	陶器 山茶椀	包含層	口15.7 底7.0 器高5.5	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや密	良	灰白10YR7/1	完存	砂粒痕 渥美型第5型式
100	1703	土師器 小皿	表採	口8.9 器高1.9	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 内外:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	やや密	良	灰白10YR8/2	4/5	
101	1902	須恵器 高杯	表採	底8.1	内外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	やや密	良	灰N4/	脚完存	3方透孔
102	1708	陶器 小皿	表採	口8.0 器高1.3	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	密	良	灰白7.5Y8/1	1/2	尾張型第6型式
103	1707	陶器 小皿	表採	口7.7 底5.2 器高1.3	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	粗	良	灰白5Y7/1	ほぼ完存	尾張型第9型式
104	1704	陶器 小皿	表採	口7.7 底4.6 器高2.0	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	やや密	良	灰白5Y7/1	完存	尾張型第7型式
105	1705	陶器 小皿	表採	口8.2 底5.0 器高1.8	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	やや密	良	灰白7.5Y7/1	ほぼ完存	尾張型第6型式
106	1706	陶器 小皿	表採	口8.0 底5.3 器高1.7	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、糸切り痕	やや粗	良	灰白7.5Y8/1	4/5	尾張型第7型式
107	1805	陶器 山茶椀	表採	底6.1	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白N7/	底完存	籾殻痕 墨痕有り 尾張型第6型式
108	1802	陶器 山茶椀	表採	口14.5 底5.3 器高5.2	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白N7/	2/3	籾殻痕 尾張型第7型式
109	1806	陶器 山茶椀	表採	口15.0 底6.8 器高4.9	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白N7/	2/5	籾殻痕 尾張型第6型式
110	1701	陶器 山茶椀	表採	口14.9 底7.5 器高5.6	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白2.5Y7/1	4/5	籾殻痕 尾張型第7型式
111	1702	陶器 山茶椀	表採	口14.5 底6.2 器高5.1	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白5Y8/1	4/5	籾殻痕 尾張型第7型式
112	1801	陶器 山茶椀	表採	口16.6 底7.0 器高4.7	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白N7/	3/5	籾殻痕 尾張型第5型式
113	1803	陶器 山茶椀	表採	底6.3	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	粗	良	灰白5Y7/1	底1/3	墨書あり 尾張型第7型式
114	1901	陶器 山茶椀	表採	底6.4	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや密	良	灰白7.5Y8/1	底2/3	籾殻痕 墨書あり 尾張型第7型式
115	1904	陶器 山茶椀	表採	底6.2	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	密	良	灰白5Y7/2	底7/12	籾殻痕 墨書あり 尾張型第6型式
116	1804	陶器 山茶椀	表採	底5.4	内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ、 糸切り痕	やや粗	良	灰白N7/	底完存	籾殻痕 墨書あり 尾張型第6型式
117	1903	陶器 天目茶椀	表採	口10.8	口内:施釉 外:施釉、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	良	素地:灰白2.5Y8/2 釉:黒褐10Yr3/1	口5/12	登窯第3小期
118	1905	陶器 片口鉢	表採	口19.5	口内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 外:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、貼付高台ﾅﾃﾞ	やや粗	良	灰白5Y7/1	1/6	常滑5型式

石製品

報告番号	実測番号	名称	出土地区	出土遺構	法量(cm)	重さ(g)	備考
41	1301	打製石斧	J18・19	SD235	(7.5×3.8)	75.5	

鉄製品

報告番号	実測番号	種類・材質	名称	出土地区	出土遺構	法量(cm)	重さ(g)	備考
75	2201	鉄製品	釘	I30	Pit1	(7.5)×1.0	(7.1)	

木製品

報告番号	実測番号	分類・名称		出土地区	出土遺構	法量(cm)			木取り等	備考
						全長	幅	厚さ		
55	木101	服飾具	下駄	J31	SK213	19.9	(5.2)	2.5	追柾目	
56	木102	容器	漆椀	J31	SK213		高台径6.8		刳物 横木取り板目	内:黒色漆後赤色漆 外:黒色漆

第６表　出土遺物観察表４

Ⅴ　まとめ

1　過去の調査成果

里前遺跡では、これまでに第1次から第４次の調査が実施されている。

第１次調査では、鎌倉時代から江戸時代の井戸・溝・土坑・柱穴が多数見つかっており、陶器や様々な種類の文字・記号等が記された墨書土器（山茶椀、小皿）が多量に出土した。

遺跡の性格は、墨書土器の分析から、年貢に関わる作業が行われていたことや、多量の陶器から、１次集積地である安濃津から輸送され２次集積地として、陶器供膳具の流通の一端を担い、地域における物資集配作業を果たしていたことが考えられると報告されている[1)]。

第２次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓や環濠的な可能性を持つ溝を検出し、第５次調査区から北西に約200m離れたところに位置するＡ地区からは「龍」の絵画土器が出土している。また、鎌倉時代の墓や井戸を検出し、墓には刀子や陶器等が埋納され、井戸からは漆椀・曲物・桶等が見つかった。その他、陶器や墨書土器も多く出土した。江戸時代は井戸が減少するものの、瀬戸美濃産陶器を中心に18世紀中頃までの遺物があり、この頃まで当遺跡内に集落が営まれていたと考えられると報告されている[2)]。

第３次調査では、三泗川へ流れ込む溝・ピット・井戸を検出したが、溝・ピットの遺物については中近世の遺物が混在し、時期は不明である。井戸のうち２基は中世前期のもので木組みの井戸からは井戸枠や曲物が良好な状態で見つかった。建物などは確認できなかったものの、中世前期から近世までの遺構が確認され、近辺に集落跡が展開されると考えられると報告されている[3)]。

第４次調査区は、第５次調査区から約300m北に離れたところに位置する。当該地の小字は「浜垣内」であるが、第１次から第３次までの調査や現況地形の観察から里前遺跡の集落跡の一端であることが予想されたため、「里前遺跡」として調査が行われた。調査では三泗川が一時期氾濫したときの流路となった旧河川跡が検出された。旧河川跡からの出土遺物はなく、第３次調査までの里前遺跡から続く、集落跡が立地する安定堆積層の北端が確認されたと報告されている[4)]。

今回の第５次調査では、鎌倉時代から江戸時代にかけての井戸・溝・土坑などを検出し、第１次調査ほど膨大な量ではないが中世の陶器が出土している。これらは特に、調査区中央の遺構に多い。また、文字や記号等が記された墨書土器（山茶椀、小皿）も16点出土した。

その種類は、「ドーマン」に類似する記号や単純な円形を呈するもの、円形と直線を組み合わせた記号のようなもの、その他、判読不可能な個体も含め約10種類である。第１次調査で確認されたものと共通する墨書も見られる。

2　井戸について

第1次から第５次までの里前遺跡の調査では、井戸が26基検出された。その詳細については第７表に示した。これらの井戸は（１）素掘り、（２）木組み＋石、（３）木組み＋曲物、（４）石積みに分類することができる。

26基の井戸のうち、第５次調査区と隣接する第１次、第２次Ｂ地区、第３次の調査区で検出された21基について井戸の時期別の変遷を第３図に示した。時期区分については宇野氏の区分を用いて、中世前期（12世紀中頃～14世紀）、中世後期（15世紀～16世紀中頃）、近世（16世紀末～）とした[5)]。

井戸が最も多く造られたのは12世紀末から13世紀後葉の時期で、素掘りの井戸や木組み＋曲物の井戸が造られる。近世になると新しい井戸が５基造られ、素掘りの井戸はなく、木組み＋結桶の井戸や石組みの井戸のみであった。

また、地下水の水脈が変化したのか、集落の中心が南下したのかは不明であるが、井戸の検出が遺跡全体に点在していた12世紀から13世紀に比べ、近世になるにつれて遺跡の中央より南にかけて点在するようになる。

一概には言えないが、これまでの報告書等で、水陸双方の交通の要所である里前遺跡は、安濃津から搬出された物資が直接到達する第２次集積地としても評価されていることから、人も集まり、必然として井戸がたくさん必要になったのではないだろうか。

［註］

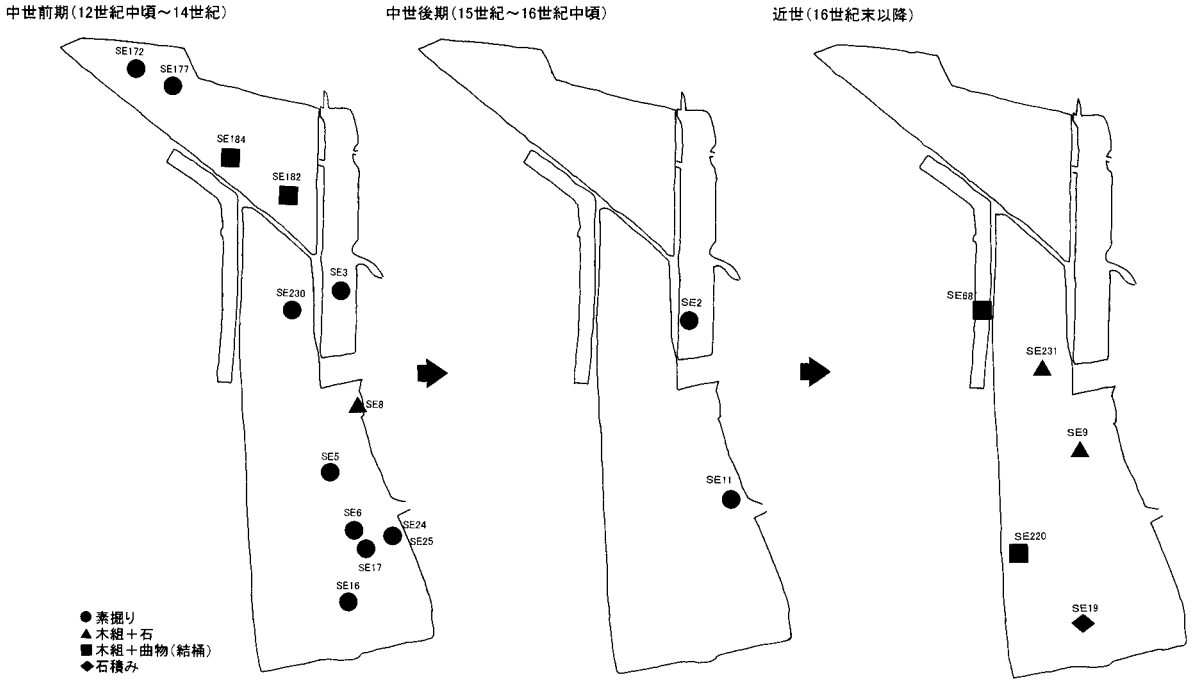
1）三重県埋蔵文化財センター　『一般国道23号中勢道路建設に伴う里前遺跡発掘調査報告』　2002

2）三重県埋蔵文化財センター　『里前遺跡（第２次）発掘調査報告』　2005

3）三重県埋蔵文化財センター　『里前遺跡（第３・４次）発掘調査報告』　2006

4）前掲註３）と同じ

5）宇野隆夫　「井戸考」　『史林』第65巻第5号　史学研究会　1982



第11図　井戸変遷図

遺構番号	調査次数	時代	形式
ＳＥ２	１次	15世紀末	素掘り
ＳＥ３	１次	13世紀初頭～13世紀前葉	素掘り
ＳＥ５	１次	12世紀末～13世紀初頭	石組み１段
ＳＥ６	１次	12世紀末～13世紀前葉	素掘り
ＳＥ８	１次	13世紀後葉以前	石組み方形１段の上に井戸枠（側枠内面に方形井桁）
ＳＥ９	１次	17世紀前半	井戸上部に石組みか。底は板材
ＳＥ11	１次	15世紀後半	素掘り
ＳＥ16	１次	13世紀初頭～13世紀後葉	素掘り
ＳＥ17	１次	12世紀末～13世紀初頭	素掘り
ＳＥ19	１次	16世紀後半	石組み
ＳＥ24	１次	13世紀初頭～13世紀後葉	ＳＥ25の掘形か
ＳＥ25	１次	13世紀中葉～13世紀後葉	底に敷石　ＳＥ24の井筒
ＳＥ54	２次Ａ地区	13世紀	結桶＋曲物＋結桶
ＳＥ68	２次Ｂ地区	17世紀前半	方形井戸枠（隅柱横桟式）＋曲物１段
ＳＥ71	２次Ｃ地区	中世前半	井戸枠（隅柱横桟式）＋曲物１段
ＳＥ104	２次Ｃ地区	不明	素掘り
ＳＥ116	２次Ｃ地区	不明	素掘り
ＳＥ126	２次Ｄ地区	13世紀～14世紀	方形井戸枠＋曲物３段
ＳＥ172	３次	中世か？	素掘り
ＳＥ177	３次	中世	素掘り
ＳＥ182	３次	13世紀後葉以前	井戸枠＋曲物２段
ＳＥ184	３次	13世紀前葉以前	井戸枠＋曲物２段
ＳＥ186	３次	不明	不明
ＳＥ220	５次	近世	結桶２段
ＳＥ230	５次	13世紀	素掘り
ＳＥ231	５次	近世	結桶１段　井戸上部は石積みか

第７表　井戸一覧表

写　真　図　版

調査区全景（南から）

図版　2

調査前状況（北から）

調査区全景（北から）

ＳＥ220検出状況（東から）

ＳＥ220検出状況（南から）

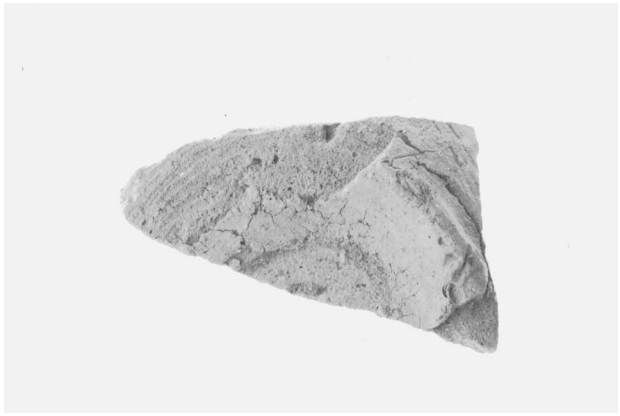
図版　4

ＳＥ231検出状況（南から）

ＳＥ231検出状況（西から）

1

3



13

14

19

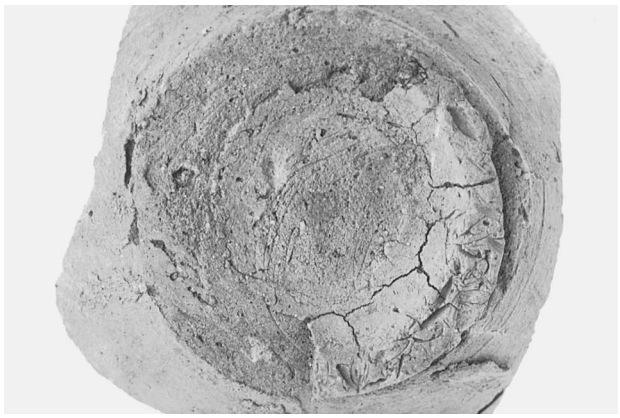
20

23

25

出土遺物 1

図版　6



26

32

34

35

34底

37

39

40

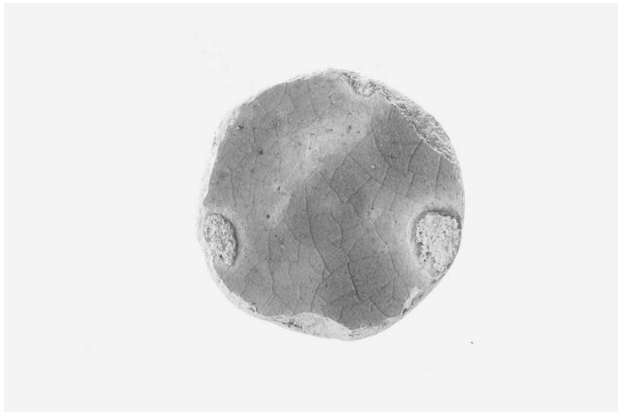
出土遺物 2

41

42

43

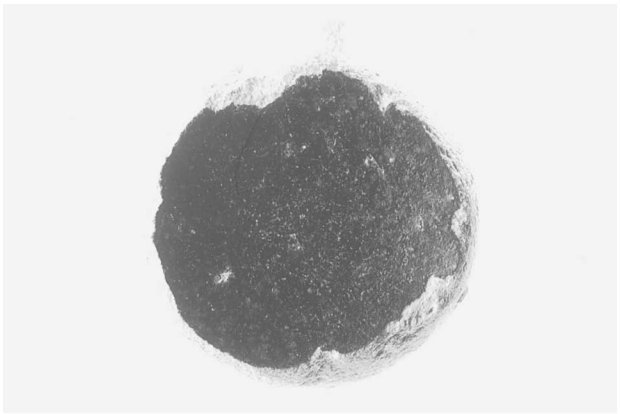
44



47表

49

47裏



51

出土遺物 3

図版　8

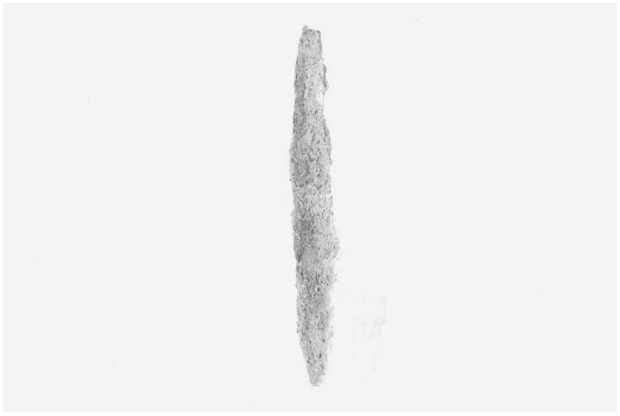
57

64

69

70

72

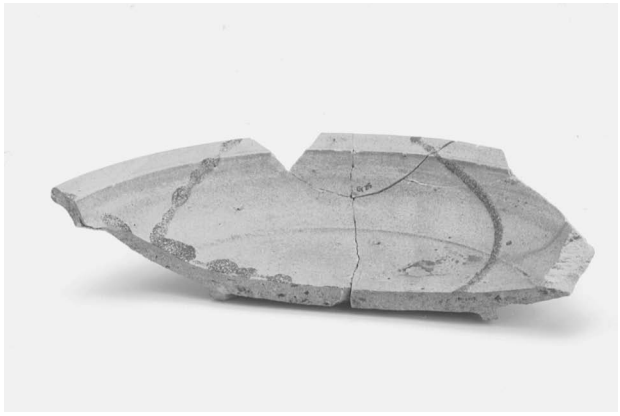


75

76

77

出土遺物４



83

92

85

92底

88

94

93

出土遺物 5

94底

図版　10

96

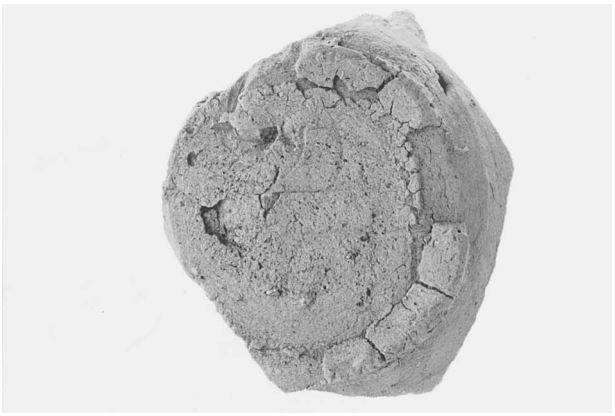
100

101

110

111

113



114

115

出土遺物 6

報　告　書　抄　録

ふりがな	いっぱんこくどうにじゅうさんごうちゅうせいどうろ（じっこうく）けんせつじぎょうにともなう　さとまえいせき（だいごじ）はっくつちょうさほうこく
書名	一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う　里前遺跡（第５次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１１５－２７
編著者名	石井康晴・上村安生
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　　三重県多気郡明和町竹川５０３　　TEL　0596（52）1732
発行年月日	西暦２００９年1月２３日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
さとまえいせき 里前遺跡	みえけんつし 三重県津市 のだあざさとまえ 野田字里前	24201	a 761	34° 42’ 49”	136° 29’ 30”	20040518 ～ 20040827	1,530	一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
里前遺跡	集落跡	鎌倉～江戸	井戸、溝、土坑	土師器（皿・鍋） 陶器（山茶椀・天目茶椀）	

要　約

里前遺跡は三重県津市野田字里前に所在し、安濃川から分流した小河川の三泗川と岩田川が合流する地点に位置する。調査は一般国道23号中勢道路建設事業に伴うもので、調査区は平成10年度に行われた第１次調査区の西側にあたる。

鎌倉時代から近世までの溝や井戸等の遺構が検出され、陶器もたくさん出土した。その中には、墨書がみられるものも確認された。建物跡等は確認できなかったものの、近辺に集落跡が展開すると考えられる。

三重県埋蔵文化財調査報告　１１５－２７

一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う

里前遺跡(第５次)発掘調査報告

2009（平成21）年１月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　（有）山　文　印　刷